

演

劇

展
望

VOL.1

はいどうも一朝野です。最近ムカツクことと言えば東京電力ですね、東京電力。この前ね、クレジットカード紛失しましてね。クレジット会社だけでなくクレジット払いにしてる東京電力にも電話して、そしたら新しいクレジットカードの番号を所定の用紙に記入して送付してくれて言われたんでそのとおりにして、それで万事決着済みだと思ってたら、それから一ヶ月位して東京電力から電話がかかってきてね。先月の電気代が未払いだって言うんですよ。「いやでも……」と言いかけるとそれを遮って「電気止めますよ」と言われましたね。それで「わかりました。それはいいんですけど、でも……」とまた言いかけると、また遮って、「電気代をいついつまでに払わないと電気止めますよ、いいですか？」と端から詰問調でね。しかもこっちの話を聞いてくれないんですよ。いったいどういう社員教育してるのかって言うね。私としては、「電気を止めるのはわかりました。それはいいですが、でも、クレジット払いにしてあるから未払いということはないはずですよ」と言おうとしたんですが、毎度「電気を止めるのはわかりました。それはいいですが」ってところでこっちの話を遮って、すごい感じ悪い怒った声で、「じゃあ止めますよ、ほんとに電気止まりますよ、いいですか？」と言って、こっちの話を全然聞いてくれないんですよ。あとから思い返すに、「電気を止めてもいい」という部分が非常に東電の琴線に触れるのかななんて穿った感想を持ちましたけれども、とにかくそうやって何度も押し問答したあとで、よくよく聞いてみると、クレジットカードの切替えの処理が済む前に先月の支払日が来て、引き落とせなかったということらしいんですね。次月分と合算して引き落とししてくれればいいんじゃないかと思ったんですが、なぜかだめなんだそうです。「じゃあどうやって払えばいいんですか？」と聞くと、支払用の領収書付きの用紙を送ったって言うので、どうもそれが郵便受けに入っていたのを自分が見落とししたのかもしれないけど、どこにあるかわからないので集金に来てくれないかと言ったら、「集金はしませんよ！」ってすごい怒るんですよ。しないならしないでいいけど、なんで客である私が質問しただけで怒鳴られなきゃならないのかわけがわかりません。で結局、わかりました、先月分だけコンビニ払いにするからもう一度用紙を送ってくださいと言うと、「じゃあいついつまでにそれで支払いますか？」と聞き返してくるので、「はい、もちろん払いますよ」と答えると、「もしそれでいついつまでに支払わないとほんとに電気止めますよ」と捨て台詞みたいに言ってそれを言い終わるなり一方的に向こうから電話をガチャンと切られました。

唾然ですよ。営業電話はお客さんが電話を先に切るまで待つってことは全世界全宇宙の新人研修で教えられてます全銀河系の常識ですイロハのイです、東京電力だけはちがうようですが。客に対してこんな対応するバカ会社は資本主義社会に不要です。東京電力は解体し、役員の資産はすべて国が没収しろ！

ほんと思い出してるうちにまた腹が立ってきた。東京電力絶対潰す。そのためにできることすべ

てやる。東京電力の株を持ってる人は自分に見る目がなかったんだから潔くあきらめなさい。

というわけでこれまで8組の演劇とプラスワン講演を拝見したわけですが、振り返って見ますに、大きく三つのグループに分けることができますと思います。ひとつはA.古典に取り組んだもの。ふたつには、B.古典的プロットを採用したもの。三つめは、C.プロットやテーマがオリジナルなものです、東電に呪いあれ。

古典に取り組んだもの、ひとつめは、蒲田行進曲ですね。これはもう古典ですね。劇中で古典として参照している日本映画の黄金期なんか朝野の世代ですら記憶にないもん。そしてヤスが結婚したあとで妊娠中の小夏に暴力を振るうシーンね。これ、DVそのものでしょう、現代では普通にNGでしょう。だからもうこれは古典としてしか楽しめないですね。

二つめは、三人姉妹。思い返すと衣装が奇天烈でしたね。トゥーゼンバフが決闘に行くときの衣装が緑色のジャージに麦藁帽子ですよ。記憶があいまいですが、確かりュックサックを背負って軍手をつけてスニーカーだったと思います。早起きしてカブトムシを取りに行く中学生か！　そう言えば虫取り網を持っていた気さえする。他の人の衣装もなんだかふるっててね。アンフィーサは割烹着着てるしね。かと思うと三人姉妹は衣装は普通なんだけど何度シーンが代わっても同じ服同じ靴。そもそもね、原作は読んでないけど、三人姉妹はみんなチョー色っぽい設定だからね。チェーホフは大前提そうだから。その上でそこに無自覚な女という、ここは譲れない一線だから。なのに長女役が生真面目な教師の側面だけしか演じてなくてね。本人のセルフイメージが生真面目な女教師なんだけどだからこそあふれ出る色気ね。そういう原作の重要な基本設定が無視されたのが一番残念だったね。あと、カップうどんがどうこうとかイリーナに迫るソリョーヌイを携帯電話についてるカメラで撮影するとか、そういうオヤジギャクは全部すべってましたので申し添えておきます。よかったのはクルイギンだね。あの役者さんが舞台に出てくるとパツと華やかになった。役者一人でこうも変わるんだね。だって脚本的にはヴェルシーニンがパーティに登場するところで華やかになりそうなものなのにちっともならなくて、そのあとクルイギンが出てきたときパツと明るくなったからね。クルイギン役の方は熱演でした。

次に、古典的プロットを採用したものとしては、ひとつめはスパイダー。いや、オリジナリティのあるシナリオなんですけどね。きっちり作ってあるところがね。つまり読者がきっちり作ってあるなあと感じたらそれはもう古典なんですよ。そのプロットが作者と読者の間で共有できるくらいにポピュラーだということですね。これを見たときにね。舞台が地獄なわけですよ。地獄と言えばロストってアメリカドラマも舞台が謎で、煉獄なんじゃないかって噂でした。ロストのほうが映像的にはずっとリアルなんですけどね。なんで殺風景な舞台で明らかに役者さんが演じてるのに、じっと見てるとテレビよりもずっと恐くなっちゃうのかね。これはやっぱり内容とフレームの問題だと思いますね。お芝居だとわかってるので安心して内容に集中していく。そして明るい舞台が全世界となり暗い客席の観客がカメラのようなフレームを意識せずに内容そのものに没入していくということでしょうな。けれどもプロット自体をあとから振り返ってみると、

悪いことしたら反省しなさいみたいな、朝礼で校長先生が話したらさぞかしつまらなさそうなテーマです。だから言葉で聞けばそんなことわかってるよ、で通り過ぎてしまうところを演劇によって異化するということですね。

朝野が朝野独特な目線で古典プロットの枠組みに入れる二つめは、sakura荘の夢。これもね、頭と尻尾だけ取り出すと、慕ってたおばあちゃんが死んでね。おばあちゃんはみんなのことどう思ってたんだろう、という、それは、みんなのこととても愛していて心配もし期待もしていたよ、という心温まって当然のヒューマンドラマなわけですね。だいたいおばあちゃんはそうでしょ。統計を取ったわけじゃないけどぼくのおばあちゃんもそうだった。だからプロットは普通の話なんだよ。それが朝野の言う古典の意味だよ。間に他の話が挟まって結末が遅延しているのはこれも古典的な引き延ばしの技法だよ。でも間に挟まってる幽霊が出たの出ないの言うあたりで、あきらかにコメディタッチなのに客席にいた朝野が恐くなってしまったのは、決して朝野が恐がりだからじゃなくて、ストーリーがちゃんと観客に伝わっていたということです。

三つめは、絶頂家族砂漠。これもこっちに入れちゃいますね。基本sakura荘と同じ構造なんですね。まず冒頭で母娘の不和が暗示され、結末で和解するというテーマはありきたりでその間に、幽霊話を挟みこむかナンセンスコメディを詰め込むかってだけですね。

残りがCグループですね。これはテーマが独自またはプロット目新しいもしくはその両方グループです。わたし、ひょっとして感想本文のほうではこれらのグループに批判的かのような文章書いているかもしれませんが、それはね、本当はちがうんですよ。このグループが最もチャレンジングであることはまちがいないです、そのことを批判してるわけじゃないです、はい。

まずバースデーですね。シーンの切り替えがテレビドラマみたいなんですね。それから台詞も役者の演技もテレビドラマ風。これは演劇の外から持ち込んできたという意味では新機軸なのかもしれませんが、率直に言って全然うまくいってなかったのもうやめたほうがいいと思います。もちろんそんな一観客の戯言など聞く必要まったくないということも併せて申し添えておきますが、とにかくこの演出はこのままではだめですね。テーマはチラシにも書いてあったけど、ええっとなんだっけ、過去を変えられたらどうのこうのというね。難しいですよ。難しいテーマにチャレンジしているという自覚を持ってください。そういう自覚が感じられなかった。あの映画のタイムマシン、2002年のほうね。朝野はあの映画好きですよ。あの映画では過去の死んだ女性は生き返りませんね。それが普通です現実です。そうじゃないのはとても新規&新奇なシナリオなんで難しいです。

二つめが、あかねさす日の暮れゆけば七福神。これは原作があるという触れ込みでしたが原作をまったく無視しているのでこのグループになります。どういう新しいことをやりたかったのかなあ。正直それすら読み取れなかったですね。あの占い師キャロルが唯一おもしろかったのに単にヒール役というだけで後半でフェードアウトしちゃったし。取り立てて言いたいことないんじゃないの？ 家族に自閉症児がいて大変です、と言われただけな感じ。もちろん大変ですよ。ただそう言葉で言われる以上に迫るものがなかったね。あと台詞がところどころコントみたいでした。らけた。

三つめが、グッドモーニング・マイ・ヴィーナス。これもバースデーみたいに演出がテレビドラマ風なんだね。演劇であえてそうすることはチャレンジなんだからそのことにもっと自覚的であってほしい。プロットは、今から思い返してみるに、最初は冷淡だった主人公がヒロインと出会って血の通った心を取り戻すというようなことが描きたかったのかな。だから中盤まではヒロインが伏線みたいにほぼ無言で舞台にチラッと登場していたのかな。それはいいと思います。ただそういう問題意識を観客に伝えるテクニックが足りてなかった。

この感想本文ではやたら基本、基本と言っていて、朝野が基本が大事でそれがないからグッドモーニングがだめと言ってるふうに受け取られかねないような書き方をしているかもしれないけれども、朝野の本意はそうじゃありませんので、ここで念のため詳しく説明しておきますと、たとえばBグループみたいな馴染みのあるテーマを表現するプロットは古典を探せば転がります。それは読者にとっては読解の基本戦略となるので、そういう意味では、つまり読者にとっての基本です。一方で、そうではない新しいテーマを表現しそれを古典しか知らない（なぜなら何かが新しければそれはまだ見てないわけだから）読者に伝えるためには、古典にはない新しいプロットを創造しなければならない。けれども皮肉なことに、この8本の中で、そのような新しいプロットを持っていたのは、Aグループの2本だった。

主要登場人物の三人が互いに嘘を付き合ってるようにしか見えないのにそれを見ているうちに弁証法的に沸き立ってくるつかワールド。事件らしい事件が最後まで起こらないなあと思ってるうちにラストで突如目もくらむような輝きを発見するチェーホフ。

つまり新しいプロットを作り出すというのは新しい古典を創造するということと同義であり、天才にしかできない仕事である。いや、逆から言ったほうがいいな、そういう新しいプロットを作り出した人を後に天才と呼ぶのです。

ええっと、じゃあ次ね。あっ。あとはバンダジェフスキーだけか。バンダはアバンギャルドってことですね。だからCグループです。以上。

ヒャダイン、東電、マヒャド、東電、マヒャデドス、福一！

- スパイダー - [虹色くれよん](#) 2011/06/05
- 蒲田行進曲 - 北区つかこうへい劇団 ([★☆北区AKT STAGE](#)) 2011/07/02
- sakura荘の夢 - [演劇サークルact](#) 2011/08/20
- 絶頂砂漠 - [ザ・チェリーガールズ](#) 2011/09/17
- バースデー - [YA-Link9](#) 2011/10/08
- 三人姉妹 - [グループ・テアトロ](#) 2011/11/19
- あかねさす日の暮れゆけば七福神 - [TEAM JACKPOT](#) 2011/12/11
- グッドモーニング・マイ・ヴィーナス - [GAIA crew](#) 2012/03/02
- 低線量被ばくと内部被ばくの脅威～私たちにできることは何か～ [ユーリー・バンダジェフ](#)
[スキー博士](#) - 2012/03/13

Q てあとらぼう



検索

経路



はい、どうも一朝野十字です。一日のうちで一番さわやかで仕事ができる時間帯が朝の十時ごろだそうです。それにちなんでネットのハンドル名を朝野十字と申します。さわやかだねー。

表紙とかタイトルとかは全部大嘘なんで気にしないでね。

さてそんなわけで今日（2011/6/5）虹色くれよんのスパイダー見に行ってきました。西武池袋線東長崎駅からあとりぼうまでのアクセスをiPhone撮影したんでまずはどうぞ。

<http://youtu.be/M45xEXKKQJY>

次に感想なんですけど、まあぼくも手慰みに小説書いたりしてるんでまれに感想もらうこともあるんですけどね。ただ漠然とおもしろかったとかつまんなかったとかのメールを受け取っても屁の突っ張りにもならないわけで。あと作品はきっかけに過ぎずそこからインスピレーションされた豊穡なけれどもあくまでその人の個人的内面的な連想を連綿と書いてあったりとか。読んでて疲れるし。

批評ともなれば作者の生い立ちから作品の背景から関連作品の俯瞰図から全部勉強研究して初めて何がしかのことが言えるのだろうし、それに対してチラッと見てチラッと思ったこと綴って感想たってそれこそオナニーに過ぎない。そしてまあ大方はそうなんだけれども、唯一の抜け穴があると朝野は思う。それはプロの批評家のようにわかるまで全部調べる代わりに、わからなかったところはわからなかったと正直に言うてしまうというやりかただ。

これは簡便で強力な批評手法であると思うのだが、プロの批評家からシロウト感想文まで意外とだれもやらない。だいたい細部がひっかかるのは全体を把握できてないからだし全体を把握できてないのは作品の説明不足か感想者の理解不足かのどちらかである。だから感想者のほうがここがわからなかったと正直に言えば、そしてまたここをこういうふうに感じた根拠は劇中のこういうところからだったとちゃんとリファレンスを明示すれば、それを読む第三者は客観的な判断ができるわけである。

要するに、読売新聞の無記名記事に今の政権はガタガタでいつ潰れてもおかしくないし潰れたほうがよいと書かれてあってもそれがどこの渡辺さんの希望的観測かわからないので判断材料にならないが、ニューヨークタイムズのだれだれの記者のいついつこれこれの取材ですと断っておけば、そういう主観を割り引いて、こいつは左巻きが過ぎて反日になってるだけだからそこは気にしないでよいしそれ以外の事実関係は参考にしてよいというふうにメディアリテラシーに照らして読むことができるわけだ。

要するにパート2、東日本近海で採れた魚も貝も海草も全部安全でそうでないというやつは風評被害とか言ってる政府発表ではなくて、ひとつひとつ測定してその事実を照らしてこの貝は安全だ、危険だ、という報道であればたとえそれが全体をすべて理解した上での報道でなくても全然かまわないしとっても有用だよ、って話だよ。

だから演劇についてなにも知らない朝野十字（さわやかだねー）が演劇の感想を書いてもいいんだよ、有用なんだよ、どう思ったかその根拠を示し、わからなかったところはわからなかったと言うという簡単な方法でそれが可能になるんだよ。けれども従来の自称・プロ演劇批評家は班目春樹原子力安全委員会委員長の意味不明言説韜晦文芸評論で読者を煙に巻いていたかどうか、いやそれは読んでないので知らないが、そしてストーリーはよくわかんなかったけど最後は泣いちゃいました（ｽｲｰｯ）みたいなブログ記事でもなく、食らえ！ 朝野十字の演劇感想！！

まずはプロットから見ていきましょうかね。今日の今日なのにもう結構忘れてるかもしれない感じなんですけど。がんばって思い出すと、最初に8人の俳優さんが全員舞台に登場して、それがまた狭いんだ。現実の舞台が狭いことをそのまま使って、狭い窓もドアもない立方体の中に8人が閉じ込められていて――。

あ、これから最後までネタバレしますけどいいよね。水野美紀が必然性があれば脱ぐように詳細な演劇感想にはネタバレの必然性がありますね。

これCUBEじゃん。と思ったらその直後に舞台の女優さんが「CUBEって映画みたいね」と言い出す。これってどうなんでしょうか。同じ映画だったら絶対NGだよね。おまえも映画だろって突っ込み入るよね、そこで醒めてしまう。でも映画じゃないからな。

みんなで誰を殺すか決めてひとりずつ死んで行く。既視感ありまくりだなあ。サバイバー。アメリカのテレビでやってたそうだね。見てないけど。リアル鬼ごっこ。読んでないし見てないけど。クリムゾンの迷宮は傑作です。ほかにもタントあると思うよ、なんでわざわざこの設定なのかな。しかもひとりひとりの過去に何かあるのかみたいに話が進みそうになるが一人を除いて実はない。

プロットの大まかな構造としては、なにかのゲームとして無関係な人間が8人誘拐されひとりずつ殺されていく話として始まる。殺され方がマンガっぽくて、プチッと電線が切れるみたいな音がして心臓麻痺みたいに死んでしまう。マトリックスだなあ。ガンツってアニメもちょっと連想してしまうなあ。

最後に生き残ったのがタクヤで、オチは、タクヤは強盗殺人犯で地獄に落ちた。そこで何度も同じゲームをさせられているのだった。このゲームの脱出方法は、タクヤが他人を助け自分が犠牲になること。ところがタクヤは何度やっても利己的な行動を取って自分が最後まで生き残ってしまうので、また同じゲームを繰り返す無間地獄から抜け出すことができないでいるという。ひぐらしの鳴くころみたいな感じ。

タクヤは一度だけ車にひかれそうになったクモを助けたことがあり、そのクモがタクヤの改心を願ってゲーム中に彼の改心を促す仕掛けをいくつも用意していたことが最後に明かされる。クモが地獄を仕切ってるの？ それとも地獄を仕切ってる閻魔かなにかがクモの姿なの？ そのへんはよくわからなかったが、そう言えば最後にクモを拝んでた男の人がだれなのかまったく不明だが、菩薩かなんかなのかな。

まあとにかくプロット的には、ノゾミという情緒不安定な女がゲームに参加することを拒否して自殺を選択し、そのみがこのゲームから脱出する方法だというのもクモがタクヤを助けようとして出した謎かけだし、医者ヒロシが、正しい答は君の中にあるとタクヤに言い残して死ぬのも、サトミがタクヤは悪い人間じゃないと言って死んでいくのも、そして最後にユカがタクヤを裏切ってあなたに反省のチャンスを与えたというのも実は言葉通りの意味で、全部クモが仕掛けた伏線だったってことで、それどころかタクヤ以外の登場人物は全部クモが操る人形で、タクヤの改心を促すためにクモが配置したそうなの。どんだけ全能なんだよクモ。

どうもそのへん腑に落ちるようで落ちない。クモ＝菩薩とでも考えないと辻褄が合わないようだが、芥川龍之介はもちろん無関係だとして、タクヤに助けられたクモが菩薩でタクヤにかかりっきりって、どんだけタクヤラブなんだよ。タクヤ以外が操る人形というのは話の辻褄としてはあってるようだけど全部タクヤの話だったというのはそれ以外の人物のストーリーを消し去り全体として話を小さくまとめてしまうデメリットもあると思う。そう言えば全部多重人格者である連続殺人犯の心象風景だったってオチの映画があったな。タイトルは失念した。

結局脚本家が冒頭にCUBEみたいな話だと登場人物に言わせたのは、CUBEとはまるでちがうオチを用意しているという気持ちがあったからだろう。なるほどプロットは終盤直前までのよくあるゲーム展開と終盤の妙に道徳的に筋の通ったオチの二段構えの構成になっている。

最初に見た演劇は、母に連れられて行った「森は生きている」だった。久しぶりにそのことを思い出した。わがままな王女が無理なことを言うたび会場に笑いが起こりとても楽しかった。あのころ、母はまだ若く母はまだ美しくそしてまだぼくを愛してくれていた。愛とは永遠でないからこそ尊いのかもしれない。

さて演劇には強力な武器がある。それはテレビドラマや映画とは異なる。劇が始まって、俳優たちが滑舌よく朗々と声を張り上げ、演劇的な大きな手振り身振りをはじめた途端に、劇の中に意識がずっと入っていくような感じがした。つまりこれは合図なんだ。ここから劇が始まりますよというシグナルだ。これは劇なんだと理解したらむしろすんなりと劇の中のストーリーに身を委ねることができるようになるのだ。テレビドラマではそのような演劇的表現を使わないし、むしろ不自然さとしてお笑いのネタになるぐらいだが、つまりそれぞれ方法論がまったくちがうということだろう。

劇場の中でナマの俳優がよく通る声で話し始めると、なるほどこれが演劇の力だと実感した。朝野は冒頭で述べたとおりわからなかったところはわからないと言い、なにがしかの感想を述べるときには劇中からその根拠を示すけれども、そのような演劇空間で演技が行われている中で、タクヤ役が小声で滑舌悪くボソボソしゃべるのが気になった。北野武が映画では主役級の役者は多少滑舌悪くても存在感があればいいんだというようなことを言っていたが、それもまた映画と演劇の根本的ちがいなんだろう。つまりは演劇においては、ヨシオ役やマコト役（だっけ？ 政治家の息子。にしてもパンフレットが不親切すぎるな。役者名だけじゃなくて役柄もひとこと書いてくれよ）の演技が普通に上手に見えたのに対比して、タクヤ役が普通に下手に見えたよ。いやもうほんと一観客としてそう感じたので後付けの理由はまちがってるかもしれないしおまえの演劇の見方のほうが悪いと言われたらハアそうですかとしか言えないけど。下手と言え、サトル役（だっけ？ タレント見習いの人）がなんか緊張してるように見えたよ。そうゆうのわかるよ。そして辛辣感想を続ければ、ヒロシ役（医者の人ね）が一度台詞を噛んだのを朝野は見逃さなかった。

つまり映画だと滑舌悪くてもボソボソしゃべってもいいけど、演劇だとだめってことなんじゃないかな。タクヤはラストのどんでん返しのキーマンだから前半は目立たぬようにボソボソしゃべる演出だったんだらうかとも一瞬考えたが、他が朗々と声を張り上げてる中でひとりだけボソボソしゃべってたらむしろ目立つじゃん。いやひょっとしてタクヤを目立たせる演出だったんだらうか。

演劇には演劇の戦略がありそれはテレビドラマとも小説ともちがうのだろう。一番気になったのがやはりラストで、ちりばめた伏線を最後に回収するやり方は映画脚本的なんだけど、最後に元のシーンにもどってまたやり直すというのは、暗い地獄のシーンで終わらせたなら観客の気分が悪からうというところからの要請が強いように感じた。ストーリー的には元に戻ってまたうんざりするゲームが始まるだけなのに最後に舞台が明るくなって正直ホッとした。また各役者ごとに一人で長台詞を言う場面がひとつずつあって、役者ごとに見せ場を作るという要請もあるのだろう。そのように考えると、演劇から脚本だけ取り出して良否を考えるのはまちがいかもしれない。エンタメ系の小説や映画では作品のおもしろさを決定付ける要素においてプロットが占め

る比重がやたら高いものがあるけれども、演劇は役者の比重がかなり高い。観客は、演技を近くで直接見たことの満足感が大きい。

有川浩の「海の底」を読んでいたら登場する人物が次々どいつもこいつも薄っぺらで陳腐で読むに耐えなかった。なんかこの作者は小説というものを根本的に勘違いしていると思う。どんなに売れていようと私は彼を買わない。それくらい小説における人物造型に厳しい朝野なのだが、あのマコト（だっけ？ 政治家の息子）の種類の極みみたいなキャラ設定にはびっくりした。とにかく冒頭から二言目には「ぼくは政治家の息子なんだ」と言い続ける。全然おもしろくもないギャグとしか思えなかった。陳腐なキャラをパロディとして見せてるつもりなのかなと思って見ていた。ところがどっこいギッチョンチョン！ マコトが呪文のように「ぼくは政治家の息子だ」と繰り返すうちに本当にその呪文が効き始めたのだ。そしてマコトがヒロシ（医者ね）を指差して「偽善者だ」というくだりになると、今まで薄っぺらな類型だったはずのマコトが生气を帯びて生き生きと立体的に立ち表れてきて、逆にヒロシの方が書割のような操り人形のような薄っぺらな存在に見えてきた。あのシーンはとても興味深かった。

また、ゲームで殺された人は暗転の間際に立ち上がり頭を振上げて舞台の袖から捌けて行った。演劇のお約束事で彼らは死んでいるという設定の表現だろうと頭でははっきりまちがいなくわかっているにもかかわらずなぜだかあれを見るたび恐かった。ラストのシーンでおそらくクモに扮したらしい俳優が声を張り上げたときも、頭ではこの女の人比較的に声が若いな。普段は学生かOLで、年に一度この舞台に立つのかな、などと確かに頭では本当にそう考えていたのに、体は地獄の底にいるかのように恐かった寒かったです。最後に舞台が明るくなって全員集合してくれてほんとにホッとしました。

なぜそう感じたのかまだ理由はわからないが、全部まとめて演劇の力というものだろう。それを体験できてよかった。

チェスタートンのブラウン神父に出てくる大泥棒の名前はフランボウという。豆知識な。

一方てあとらぼうのホームページを見ると、舞台の奥に映像装置があった。確かに冒頭で使われていて、すでにyoutubeで見てたけど、あれってCMとか予告編とかじゃなくてプロローグとしてラストの伏線になってたんだな。一番後ろの端の席で見てたんだけど、冒頭で舞台の中央にヒロシがうつぶせていたらしいんだがそこんところがよく見えなくてちょっと残念だった。

関連ページ

虹色くれよん

<http://www.stmi.jp/nijihiro/>

東京の小劇場スケジュール

<http://tokyo.engeki.client.jp/>

タマフル東京の小劇場特集

http://www.tbsradio.jp/utamaru/2010/10/post_742.html （前編）

http://www.tbsradio.jp/utamaru/2010/10/3_1999.html （後編）

滝野川会館



検索

経路



はい、こんにちは一朝野十字です。

前回分もちろん読んでくださいましたよね。読まないと話つながらないんで読んでからきてよね、朝野十字の新・新批評第二回。

これはね、知らないことを知らないと言い、わからなかったところをわからなかったと言えばそれが免罪符となって天国へ行けるという従来批評へのプロテスタント批評なんですね。振り返ればシーズン7で明らかに福音派らしきジャック・バウアーはラストで不治の病に罹りイスラム教徒に最期の懺悔をして死を覚悟するわけなんですけどね。昔なつかしペイトンプレイスというテレビドラマで後に自殺するアンが恋人のロッキーとデートしてボートの上で「気持ちって変わるのね」と述懐したことをありありと明視する2011年7月2日、以上、なんの伏線でもないですよ、これは小説ではなくて演劇感想だから。

というわけで行ってきました、北区つかこうへい劇団「蒲田行進曲」。

んーこれはね、やっぱりね、なにも検索しなくても自明の真理というものはありますね。この世界は、天才とその他大勢で作られてるんですよ。でもね、あともう一人だけいるよ、それはね、彼が天才であると知ることのできる人間ですよ。おれはね、なにも調べてないけど、この脚本家は天才だね。それが直感できたおれってすごいね。

普通の人間は、つかこうへいはすごいらしいと聞いてそんなもんかなと思うだけだけど、おれはつかこうへいなどなにもものぞと思って80年代演劇シーンをカレーにスルーして、いま残り香のような小劇場のさよなら公演を一度見ただけでつかこうへい天才と理解した。おれってすごいなあ。ていうかおれってカッコいい。

いやおれもね、80年代全然生きてましたけどね。いろいろ忙しくてね。朝野の80年代と言えばザイログ社のZ80ですね。アセンブラとか使わないから。機械語16進数でそのまま誂んじてたからね。CD 0A 00 で、0A00番地をコール、リターンは、C9。今思い出してみようとしたら普通に思い出せたよ。マシン語モニタ立ち上げて16進数直接打ち込んでゲーム作るのに忙しかつたので演劇とか見てる暇なかったっす。おれの作ったゲーム、カセット・テープ・レコーダに記録されて工学社から発売されて80年代秋葉原の店に並んでたんだよ。だからさ、オタクってのはさ、たとえばおれのことなんだよ。だいたいさ、C言語しか知らない若い奴らってなんでスタック回避しなきゃなんないか本当の意味でわかってんのか。機械語レベルでわかってんのかよ、そのイメージ知らないでプッシュとかポップとかほざいてんじゃねえよ。もうアボカドかと。その上でさ、アニメオタクとかさ、そういう用語の使い方としてまちがってるからね。アニメなんてだれでも見てるじゃん。見たらわかるじゃん。そんなのオタクじゃないから。そういう変な使いかたされる前まではオタクという言葉に悪いイメージなかった。コンピュータギークという意味以外にオタクという言葉使うの全面禁止令な。絶対な。

はい、そこで、ヤスが妙に映画に詳しいのは正に凡人だからで……とか順に語っていくスタイルだと長くなりすぎて忙しい現代人みなさんにご不便だと思いますので、この演劇のキモからズバツと！先に言いましょう。それはもちろんラストのクライマックスで、ヤスと小夏の二人の

芝居が長く続くうち、小夏は、ヤスを好きになったからヤスと一緒にいたいと言い出し、ヤスに今夜帰ってきてくれ、出産時に立ち会ってくれ、と言い始めるのですが、ヤスは、最近銀ちゃんが冷たい、かまってくれない、小夏との生活から感じるのは寂しさだ、と言いつける。つまりまったく話が噛み合っていないんですね。ポリフォニーだね。

いやあ、ポリフォニーって用語、朝野が覚えて大分経つのにいっかな使う機会がなかったところ、ここで使えて幸せだなあ。ポリフォニーだよ、ポリフォニー。もっとも朝野のポリフォニーは小説系でバフチン仕入れなんで、演劇での典型的使われ方、知らないんですけどね。

とにかくここで、おや、おもしろくなってきたな、と思いましたよ。その前まではどうかというと、後半、ヤスと小夏の二人芝居がずっと続いて、小夏が料理が下手で家庭的でないとかヤスの実家のトイレでタバコを吸ったとか結婚式の引き出物がどうこうとか、ヤスの親戚が結婚を無邪気に喜んでいたりとか、小夏の親が腹の子がヤスの子じゃないと知ってるかどうかだとか、ヤスの親戚からの贈物を全部送り返しているだとか、そういうつまらない、いやほんとどうでもいい憂鬱な話が延々と続くんですよ。その前は、銀ちゃんが出てきて、いよう、ペテン師、みたいな感じで明るく話してたのに。銀ちゃんはヤスの心配もするし、小夏にやっぱりおれと結婚しようとも言っていますが、小夏のほうが断っちゃうんですね。これねえ。いや、そこは後回しにして、とにかくね、銀ちゃんは薄っぺらでいい加減で調子がいいだけだなあと思って見てたんだが、後半、ヤスと小夏が現実的な話を続けていくうち、うんざりしてきてね。小夏がヤスを好きだと告白するシーンもね、いやほんと正直、寂しい感じしかなくて。真実の愛ってこんなにしょぼい感じのもんなのか。だったらウソでも銀ちゃんのほうがいいよ。銀ちゃん、舞台に出てきてよ。そう思ってたなら、小夏と痴話げんかを続けていたヤスが唐突に銀ちゃんに電話するんですよ。小夏のそばにいてやってくれ、出産時に立ち会ってくれ、やっぱり銀ちゃんじゃなきゃだめなんだよ、と言う。このまったく論旨不明無理筋のゴダクを、なぜか、ああ、そうだ、その通りだ、って観客として思ったですよ。ですからここがシュジェートですね。

実際のところ、銀ちゃんだけでなく、ヤスも小夏も言ってること支離滅裂だよ。劇自体も時間軸錯綜していて心理的因果関係も納得しがたいし起承転結もはっきりしない。ですからね、ぼくはここが言いたい。

ある理想の小学校のあるクラスで読書感想文を生徒たちが書いてね。どれも理路整然としているわけですよ。この小説は友情の大切さについて描いていると思いました。友情って大事だなと思いました。これから、友達と仲良くしていきたいと思います、みたいなね。それ、その名前が起承転結三一致の凡人小学校ですよ。先生、褒める褒める。そんな中、ひとりの天才少年が現れて、突然「蒲田行進曲」という作文を書く。醜いアヒルの子たちの中の白鳥。

ナラトロジーのなにがつまらないかと言うとちっとも文学じゃないところですね。我々はすでに文学研究のストラテジーとしての詩学を持っているんだから、それで行きましょうよ。ヤスの行動も動機も非常識で目的不明で行き当たりばったりと考えることに代えて、このシュジェートがどのような効果を狙っているのかを一つ一つ見ていきましょう。

まずヤスと小夏の現実話ね。ラストで銀ちゃん好きだと観客に感情移入させる技法としての。これ長い長い。たぶん30年前だったらもっとずっと骨身に堪える現実話だったと思う。ここで心底観客におまへの今の立ち姿を思い知らせていくんだね。ヤスが一度主役をやってたった一言の台詞が言えずに映画全体がぼしかったというエピソード、ずいぶん極端なエピソードだけど、これはこれと対比して銀ちゃんをスター視する視点を観客に与えるわけですね。この世界には、ここぞと言うときにここぞという芝居を決められるスターとそれ以外がいる、その二つははっきりとちがう、だからスターはすごい、そして銀ちゃんはスターだ、というロジックですね。だからヤスが自分は大部屋だ、なんの才能もない凡人だ、と言うたびに、それと対比しての神に選ばれし才能あるスター銀ちゃんの輝きが際立ってくるという技法ですね。

やっぱり思い出してしまうのが雨に唄えばだよね。あれも語れるほどには覚えてないんだが、たしか映画業界の中の話だった。映画業界関係者が映画っていいよね、楽しいよね、と言い合うという、本当は身も蓋もない話だよ。一步誤ると内輪話になりかねないところがそれ自体楽しい映画として成立している。印象的なシーンとしては、舞台のセットでジーン・ケリーが女の子と踊るじゃん。踊りながら舞台の装置のスイッチを入れていく。月が輝き、風が吹き、スモークが立ち上る。みんな本物じゃないんだ。お芝居だ、お芝居のセットだ。ところそれがリアルな恋愛のあの感じを確かに持ち始める。ウソがリアルでリアルがウソの転倒が起きるんだね。銀ちゃんってそうでしょ。銀ちゃんが小夏をヤスの家に連れてきて、芝居とも本気ともつかない感じでヤスに小夏を押し付ける。これはお芝居だ。ウソだ。そう思う観客に向かって、銀ちゃんが、そうだよ、芝居だよ、ウソだよと言う。そうやって手法の露呈をしつこく続けるうちに、本当のリアル（って言葉自体転倒してるけど）が確かに鮮やかに立ち上がってくるのだ。その難解な理論を血肉として軽やかに体得している天才脚本家にしか書けない。

これは銀ちゃんがスターだという話だ。でもね。銀ちゃん、実は大根だっという設定なんだよね。カレンダーの仕事も他のやつに取られちゃうしもともとこの撮影所出身じゃないしね。だからこの映画に賭けてる。ヤスもまた一生大部屋から這い上がれないけどこの映画で階段落ちやんなきゃなんない。銀ちゃん大好き話の音量が大きすぎて陰に隠れちゃうけど、ヤスが階段落ちやんなきゃならないまっとうで論理的な理由はちゃんと根拠付けられていてそれは経済的困窮だ。小夏も体ボロボロでこれが最後のチャンスだという気持ちでどうしても赤ちゃんを産みたいと思っている。この三人のシチュエーションがパラレルになっているのはもちろん脚本上の意図があるにちがいない。

なぜ銀ちゃんがスターかという、ヤスがそれを本気で信じているからだ。つまりスター産業っていうものの構造のメタファーもしくはカリカチュアと言えるんだね、この二人の関係が。スター産業って言葉はいまふと思いついただけで、そんな言葉はないのかもしれないが、たとえば昔むかし日本には映画産業があったそう。蒲田行進曲の歌詞を見ればなんとなくイメージできる。てゆうかずばり歌ってあるじゃん。「カメラの眼にうつる かりそめの恋にさえ 青春燃ゆる 生命は踊る」いまおれがジーン・ケリーのうっとりタレ目を例に挙げて話してたことそのままだよね。その舞台は「紅の都 光の湊 キネマの天地 花の姿 春の匂い あふるところ」蒲田だ。むかし撮影所があったそうだ。あれ、でも舞台は京都じゃなかったっけ。その辺どうなってるのだろう。調べて書くアタマも時間もないのでわからないところはわかりませんで済ますと冒頭に断っておいたが、これくらいはちょっと検索してみようか。ウィキペディアによると蒲田行進曲の初演が1980年だ。演じられている時代は、goo映画あらすじにも明記されてなかったけど、京都撮影所で時代劇撮影全盛ってことは1960年とかそれ以前なんじゃないかな。つまり昔の映画スター銀ちゃんの話の後になって振り返ってるってことじゃなからうか。つまり30年前「紅の都 光の港」があったよ、って話をつかこうへいが1980年にしたわけだ。京都撮影所が舞台なのにテーマ曲が蒲田なのは、映画産業全体がモチーフですよ、って意味だろう。しかしてそれからさらに30年後の今、上演されて、それを見ると、30年前、つかこうへいなどを輩出した小劇場の演劇が輝いていた時代があったよ、という話に見えてしまうね。そのころまったく演劇を見てないおれですら、野田秀樹、鴻上尚史、唐十郎、ああなんとなく名前は知っている。

みんなが映画が好きだと思ったから映画産業が輝いた時代があった。みんなが演劇を見に行ったら演劇がブームになった時代があった。みんながだれかをスターだと思えば現実にその人がスターになってしまう。それが幻の都で起こる現実なのだ。銀ちゃんとヤスと小夏のパラレルなシチュエーションはそのような「信じれば思いが現実になる」というモチーフを体現しているのではないだろうか。言い換えればそれは、「希望」だ。

でも希望するのは詩学の見地からは数あるモチーフのひとつに過ぎないからそんな演劇とも文学ともさして関係ない話はさっさと切り上げて、技法の話に戻しましょう。

冒頭のシーンで坂本竜馬（だったかな？ よく覚えてないまちがってるかも）がいきなりヒロインにブチュブチュにキスして、（たぶん）近藤勇に窘められるのだが、これは新撰組の映画のワンシーンだった。その練習風景だった。このシーンは中盤で再現されて、坂本竜馬役がたまたまいなかったの、銀ちゃんが代役で練習が始まる。そしてヒロインの小夏にブチュブチュにキスしたところを、すでに小夏と結婚している近藤勇役のヤスに窘められるわけですね。女をもっと大事にしろと。ここね、脚本的には一二を争う見せ場のはずなんだけどね。芝居と現実が混淆して異化作用が発揮されるべきまさにそのシーンのはずなんだが、なんかあっさり流れちゃいましたね。あんなベロベロチューされたヒロイン役だけがご苦労様でしたみたいな。なんかおかしい。

そのあとさらにおかしくなっていて、うまく台詞を言えたヤスを監督が褒めて、プロデューサーかだれかみたいな人が出てきて、銀ちゃんは古いタイプの俳優だ。ヤス、おまえやってみろ、とかなんとか言って、そのあとどうだっけ？ 朝野の記憶としては、ヤスがなにも言わずうつむいて舞台の袖に逃げ去って、その場にいたほかの人たちはノーリアクション、ってところくらいしか覚えてないんだけど。

なにあれ？ 印象薄かったから覚えてないし覚えてないからますます意味不明なんだけど。推測するに、銀ちゃんが古いタイプの大根役者で、時代劇映画の時代にはそれでよかったけれども新しい映画とかテレビの時代では消え去る運命なんだよ、ってことの強調とか。ヤスは他の役者の台詞まで丸暗記していて、咄嗟に名演技して、プロデューサーに認められるけど、やっぱりそこから逃げ出してもとの大部屋俳優に戻るとか。それけっこう重要な上にもっと語らないと説明不足じゃないか。もしくは他と不整合だからばっさり切るかどっちかのはずだ。これここほんとにつかこうへいのオリジナル脚本どおりなの？ なんか重要シーンか台詞削ってないか？ 非常におかしい。

でもまあそれは、金を払ってスクリプト買って読むなり調べるなりきちんと勉強すればわかるところを、そうはしないで、憶測でブツブツ言っても卑しいので、そういうことは言わずに、あのくだりのシーンはよくわかりませんでした、とだけ言っておきます。すいません。

わからなかったと言え、ラストの階段落ちのシーン、ヤスと小夏の二人芝居がそのまま延長して、小夏が舞台の後ろに下がり、その前でヤスが階段落ちの演技をして、ヤスを刀で斬るのも小夏役の人だし最後にOK出しするのも小夏役の人なんだよね。いや実はさっきちょっとウィキペディアを見たとき、「クライマックスシーンの10メートルの高さの階段から転がり落ちる『階段落ち』は圧巻」と書いてあるのが目に入ったので、たぶんここはまちがいに改変されていると思うんですがね。劇場のキャパの都合とかもあって十メートルの階段落ちはやめた。でもそこで小夏がヤスを斬ることに代えたんだとすれば、これは非常に大胆で野心的な変更点なんじゃないだろうか。調べもせずに妄想を連ねるのはほんとやめたほうがいいだろうけど、でもここがオリジナルとは変更されているんならば、モチーフの重心を大きくヤスと小夏の関係に移し変えたということであって、大変更点だと思う。んーそういう解釈もアリだとは思いますがね。でも

そうすると「希望」が現実的になりすぎてしまう懸念が.....映画ではない演劇であればこそそのアドバンテージが.....いや、ほんともう妄想はやめて、小夏がOK出したラストは意味わかりませんでしたとだけ言おう。

さあ、今宵もふけてまいりました、お集まりの皆様、最後になりましたが、銀ちゃんは結局小夏にふられちゃいました。それすなわち銀ちゃんがスターだからです。断固そういう技法です。あのほらあれ、ふられたときにさ、銀ちゃんがキャバレーの呼び込みみたいなキンキラ服着てさ。マイク握って客席に下りてきて、今小夏にふられたことを報告するシーンね。

よかった。銀ちゃんかっこよかったよ！ その前の車呼ぶ早台詞からどんどん盛り上がってたよ。ほんとヤスはかけらも花がないよね。後半のヤスの長話で輝いてたのは、銀ちゃんが結婚式に乱入した話と、銀ちゃんに電話したところだけだよ。人間は平等じゃないよ。ヤスは決してスターになれないゆえに銀ちゃんはスター、このロジック完璧に腑に落ち納得できました！ 普通ならだれも無視して相手にしないヤスにまで気遣う銀ちゃん.....。

銀ちゃん、ありがとう、ほんとにいろいろなモチーフの重層的なね。ジーザス・クライスト・トリックスター！ 大江健三郎の言うカーニバルのね。そういう本当に楽しい非日常体験をありがとう！！

銀ちゃん万歳！

つかこうへい万歳！

北区つかこうへい劇団万歳！！

🔍 吉祥寺權スタジオ



検索

経路



あのイタコ役の人ね。あの人の演技が一番安定してましたね。脚本上もキーパーソンだしね。この舞台の要ですね。いやむしろ演劇の脚本というのは、まず先に役者さんがいて、その役者さんを生かす役なりシーンなりを思いついて、最後に全体のストーリーを決めるという手順なのかもしれないね、知らないけど。でもそう考えると納得がいきますね。脚本上の要が彼女でありゆえに彼女をその役にあてたのだ、名探偵の自負をかけて朝野はそう断じます。

吉祥寺って駅前からすでに住宅街ですからねえ。そこをずっと日没後に櫛スタジオまで歩いていったんですがね。なんか道も細くて暗くて寂しい感じでね。恒川光太郎の夜市のような異世界に連れ去られそうなね。前回の滝野川会館もね。あんときは昼間だったけど駅から歩く途中でお墓の横を歩いてカラスが何羽も塀にとまっててねえ。墓場の鬼太郎のね。水木しげるの漫画のサラリーマンが仕事終わって帰宅途中に一本道をまちがえてフッと異世界とかまんま地獄とかに迷い込んでしまうあの感じね。魔界・東京の西部のね。実際荻窪越えるといまだにいろいろ魔物とかいますよね、首都東京。

そんなわけで開演１０分前に着いたんですが開演が１０分ほど遅れて都合３０分近く待たされて一人で来たもんだから手持ち無沙汰でした。舞台が狭くてびっくりしました。どうやるんだろうと思いました。それは素人の杞憂で、十人くらいの役者さんが全員出てきてもちゃんと劇になってました。こう、劇場全体がね、完全に真っ暗になるわけですよ。その前に携帯の電源切ってお姉さんが前説で注意してましたけど。なるほどこの迫力は単純だけど強力ですね。パッと明るくなると瞬時にサッカーを観戦している状況に入り込むことができますね。暗転時には舞台も真っ暗なのに役者さんたちはどうやって自分の位置を決めるんだろう、えらいね。

まあともかくね、出だしが、ゲストハウスの共有スペースで住人がサッカーワールドカップのテレビ観戦という。まあいまどきのゲストハウスと言ってもいろいろあるようなんでどうなのかなあ。どうもめぞん一刻みたいな昔風の下宿屋にしか見えませんでしたけどね。でも80年代だってあんな美人の管理人がいて住人みんなが江戸落語の長屋ものみたいに仲がいいなんてところ、実際にはなかったと思いますけどね。だからこの設定はめぞん一刻のころからすでに現代風俗を切り取るってことでは全然なくて、架空の桃源郷話に近いのだろうと推測しますけどね。でもまあそういうのあればいいだろうなあとは思うし、うさんくさすぎる宮台真司がそういうゲストハウスが最近できてきたとラジオで言っていたのでにわかには信じがたいけれどもあながちありえない設定ではないのかもしれない。

あのね、あとでこの劇のいいところを褒めますからね、ここは冒頭を見ていたときの朝野のそのときの感じをそのまま書いただけなんですけど、冒頭で80年代めぞん一刻風長屋人情話なのかなあと思って、それつまんなそう、と思いました。これがテレビだったらすぐにチャンネルを変えてるところなんですけど、しかも、そういう冒頭の朝野のストーリー予測は別に大きく的外れだったわけではなかったんですね。だからこんな凡庸設定で始めてどうやっておもしろくするんだ、いや、プロットの無理、というふうにそのときは心配しました。そのあとのことはこれから順に書いていきますから、おいおい変化しますから。ただその、ゲストハウスの住人の日常、管理人は竹箒で庭を掃除し、ボクシングをやってる若者はランニングし、絵描きの卵の女の子とその恋人はデートの話をし、そういうスナップが狭い舞台で描かれて、そのやりかたが映画ともテレビドラマともまったくちがうんですが、ちゃんと伝わるんですね。舞台の奥にソファがそのまま置いてあっても、手前で管理人が竹箒を持てばそこは庭だとわかりますよね。なるほどこうやるのかーみたいなね。これはほんと観劇初心者としていちいち感心しましたね。

ええっとそれで、冒頭でこのゲストハウスのオーナーのおばあさんが死んじゃったってことが台詞で明かされます。今は孫娘がオーナーで、管理人はまた別にいて、オーナーと仲良しの女の人がやってます。孫娘は生前のおばあさんとうまくいってなかったようです。ここまで見ても、やっぱり私の杞憂は続いていて、ああ、先に結末を明かして、シクロフスキーの言うプロットの放棄ですね。それで過去の人間関係を会話で振り返る話なのかなあと思いました。それって退屈そうだなあと思いました。そしてその朝野のストーリー予測も大枠ではまちがってなかったのです。ところがですね――。いや、その前にね。おばあさんが生きていたころのシーンが間に挟まましてね。特段説明もなくおばあさんが生きてるころの話と死んだ後の話が交互に出てきて、基本に忠実な朝野としてはそういうやりかたってどうよ、とむしろ一般論としてはネガティブ評価なんですけどね。めぞん一刻風の人情話ならもっとストレートに描いたほうがいいんじゃないの、けれん味ちょっと強いかもよ――なんて思ってたところが、いやいやとんでもない。このあと、住人のひとりが死んだおばあさんの幽霊を目撃するんですよ。で、このあたりからコミカルなギャグが頻繁に入るようになるんですが、これもね。ここを見ていたときの朝野の感想はですね、いやだって、冒頭けっこうシリアスもしくは人情話系っぽかったんで、コミカルを許す設定なら冒頭でそれを示しておくべきじゃないかと、そのときはそう思いましたね。映画評論家の町山智浩も冒頭でギャグをかましてラストで人情話に持っていくのが王道だって言っていましたよ。ですからそういう王道からは外れてます。

生真面目な朝野としてはですね、コミカル色が強くなった辺りから不審感さらに不信感が募ってきましてね。つまり子供の描いた絵は自由奔放ですよ、解釈不要です。そうじゃなくてまっとうな大人がちゃんこの演劇をコントロールしてると信じて見てきたわけですよ。そしたらコミカル色が急に強くなるとほぼ同時に、幽霊を見たとか写真に写ったとか、あげくにイタコ役の女の人が死んだおばあさんと話したとか。そのとき、正直、なぜかほんとにちょっと恐くなってきちゃいましてね。びっくりですよ。舞台ではコミカルな演技が続き、明らかにリアルに欠ける大道具小道具が並んでいるのに、テレビでスプラッター見てたときにはちっとも恐くなかったのが、なぜか今ちょっと真っ暗な客席で怖い。これはねえ、ほんとすごいなあと思いますね。朝野だけなのかなあ。ほかの観客はどうなんだろう。いちいちアンケートしたくなるくらいなんです、しかもこの舞台だけじゃなくて、前回も前前回もそうだった。たぶん感情移入の度合いがテレビに比べて桁違いに大きいんですね。

子供がせがむのでディズニーランドに連れて行って、子供がせがむのでアトラクションに乗って、そしたら意外と楽しくてハラハラドキドキしたってことならディズニーの勝利です。それと同じで、頭ではストーリー展開に不審感を募らせながら、心と体はハラハラドキドキしてるんだから、これは演劇の勝利だと素直に認めるほかないでしょう。こっから先さらにね、死んだおばあさんが隠し部屋を持っていたことがわかって、その部屋には何があるんだろうという謎かけが始まりましてね。テレビドラマ・トリックのBGMが流れたときは思わず笑いましたけどね。あるいはロストとかを脚本家が参照していることを台詞に紛れ込ませるんですけどね。強烈にけれん味が強くなり続けてって、ロスティな朝野はこのあたりからぐいぐいおもしろくなっていきました。

でもね、今から振り返ってみると、どうなんでしょう、この脚本。ぼくはおもしろかったけど。ぼくって少数派じゃないかなと。前の席にいた若い女の子とかは、隠し部屋が出てきたあたりでスーッとわかんなくなってきた気持ち引き潮状態になってしまったんじゃないかと。そのあたりから咳したりドリンク取り出してガブガブ飲んだり携帯つけたりしだした観客増えてたよ、ご注進。

でもねーこれはねー。評論家とか読者とか観客とかはね、じゃあどうすればいいんだ、ってことは一切言わないですからね。ただ、sakura荘の人情話と、途中で長く挟まる幽霊話や隠し部屋の謎が脚本家の中でなぜ矛盾なく両立しているんだろうか。本当は、sakura荘の人情話系は、全然脚本家の興味外なんじゃないかと、同じくそこが興味外の朝野はそう推理しますけどね。あの孫娘と管理人がひとしきり人情話をして、なんか納得したような顔でヘラヘラ笑って暗転するシーンとかね。唐突で恐縮ですが、かつてシュガーってアイドルグループがザ・ベストテンに出て、普段どうやって暇つぶししてるかと聞かれて、青春テレビドラマごっこをしてると言って、くさい台詞と芝居をくさく真似してたのをふと思い出しました、わかりにくいたとえ話ですいません。要するに寒いってことです。実際に演劇上のファクトとしてですね、めぞん一刻系人情話は全然輝いてないってことなんですね。脚本家の興味がここにはないことは明らかだと思いますね。

役者ってことで言えば、冒頭に申し上げたとおり、イタコ役の人がよかったですね。それは複数の理由があると思います。たとえば絵描き卵女の子の恋人役の男の人は、出番も多いし感情表現も大きいですね。だからすごいがんばらなきゃいけない、その分もし粗があればそれも目立ってしまうという重要で難しい役でした。その点、イタコ役は控えめで抑えた演技をしてそれが実はおもしろいといういい役で、そこを淡々と落ち着いてこなしていたので結果として朝野的に高評価でした。というわけで一言触れておかなければならないのは、絵描きの卵役の人は、とても下手でした。あの、劇を壊すぐらい強力に下手だったと、ぼくは思うんですね。ここでいう下手というのは、才能とかじゃ全然なくて、劇にフィットしているかどうかというだけです。たとえば舞台の隅に置かれたソファは劇にフィットしてましたよね。そういう意味でフィットしてなかったということです。

まだ三回しか東京の小劇場を見てませんが、概ね、男性より女性陣のほうがうまいし、若い人より年上の人の方が安定しているようです。ですから、経験・稽古量と劇にフィットするかどうかが正比例しているんだと思います。つまり絵描き卵役の人はちょっと稽古の時間が足りなかったのでしょうということであり、役者に対する批判ではなくて、制作側の人、そうと知って彼女を使ったんなら不誠実だということだし、知らずに使ったんなら無能だってことで、どっちにしろこの点は言い訳の余地がないように私には見えました。

最後に隠し部屋の秘密が明かされるんですね。そのとき、さあ発表です、と管理人が口火を切ると、「隠し部屋には何があったの？ 早く教えて」と住人が口を挟み、それが言葉とは裏腹に結果発表を遅延させるわけです。すぐに、ああ、シクロフスキーの遅延だな、と気づきますよね。全体、sakura荘の予定調和人情話を冒頭と結末に置いて間に幽霊話と探偵話を挟みこむことがシクロフスキーの引き延ばしの技法なんだよね。その他にも、これは多声だ、対比だ、というふうに、理論書で学んだ技法が普通に使われているのを目の当たりにしてとても嬉しかったです。いや、だってさ、今まで無料地上波テレビのドラマとかテレビ局の作った映画とかを見るたびに、えっ？ どこに技法があるの？ どこに読者をおもしろがらせようという意志があるの？ というね、おまえら高給もらってる分継続してしまうからただのドシロトよりずっとたちが悪いなという、その一方で、カンパを求めるようなホームページにシロウト演劇サークルですと言ってる劇団の脚本家が、なぜかちゃんとそういう演劇の勉強をした上で脚本を書いている。歴然差。これはね一來ますね第何次か知らないけど演劇ブーム。人材の配置がそうなってるからあとはみんなが気付くかどうかだけだから。今ふと思い出しましたけどね、CNNでやってたハンバーガーの宣伝で"Where's the meat?"とおばさんが言うのがあって、うちのハンバーガーはお肉たっぷりですって言うねえ。なんでこんな古い記憶を急に思い出すかなあ。新しい人の名前は全然覚えられないのに。歳だな。って話ではなくて、つまりここで言いたいことは、魚場は変わる。そう気付いてあてずっぽうに三回東京の小劇場を見てきましたが、どれもおもしろかった。十分おもしろさの一定水準を超えていた。

もうそこんどこまちがないですから。この部分解決編ですからね。ホームページに書いてあるとおり、ぼくは名探偵です。常に名探偵が先んじて真相にたどり着くんです。だから一般読者のあなたに教えてあげるけど、家に閉じこもって無料テレビを二時間見るよりも、ちょっと出かけて東京の小劇場に行ったほうが断然おもしろい。そんなふうに世界はすでにパラダイムシフトしていた。そのことを自信を持ってお知らせできることを心から嬉しく思います。ぜひ、劇場に行ってください。

東京都新宿区山吹町361



Google



検索

経路



観劇四回目。今までもたいがい小さな劇場だったが今回はとりわけ小さかった。舞台が狭いだけでなく客席も目視で30～40席ぐらいに見えた。つまりこれはライブ形式なのかなあ。今までは舞台以外は真っ暗になって、他の観客を忘れて劇と一対一で対面していたが、全体部屋が狭いために舞台が明るくなると観客席にも光が届いて、しかも舞台から見て斜め左のサイド席の一番後ろに座ったものだから、観客席全体が俯瞰できてしまう感じだったんですね。ほぼ満席に見えたけど座席数が満席でも40くらいのようなようだったから、たぶん小学校のークラスくらいの数ですね。これだけ観客が少ないと、舞台と観客の一体感がより生まれて、全部でひとつの演劇空間みたいになるのかなという予想は大外れだったです。そのことは後述しますけどね。

舞台のセットがとても細かく作りこまれてましたね。振り返って見るに、一回目のスパイダーのときはキューブみたいな部屋ってことでほとんど装飾がなかったし、二回目の蒲田行進曲は、場所も時間も次々移り変わって、全部演技で表現して、舞台の大道具ってのは全然なかったような記憶があります。三回目のsakura荘の夢は、客席から向かって右手奥にソファがあったきりだったと思います。それに比べると、今回はとても細かくセットされていて、ショーパブの楽屋兼休憩室みたいな場所で、客席から向かって左から順に、舞台へ通じるドア、奥の部屋に行く通路、衣装や小道具の置かれてる棚、化粧直しのための鏡と据付けのテーブルと椅子、トイレへのドア、小道具などの置かれた棚、ソファ、そして右端には外へ出る通路、それらの手前にキッチンテーブル、って感じだったと思います。劇を通じて場所が移動しないので全部作りつけたってことなのでしょう。

ところで、すみません、世事に疎くて、ショーパブってなんなんだろう。パブってキャバクラの同類で、ショーパブってショーのついたキャバクラだと思ってた。でもこの劇中のショーパブはそういうコンパニオン全然雇ってないので、コンパニオンのお姉ちゃんいないショーパブの意味がわかりません。しかもですね。そのショーパブの支配人の役を、男優さんが化粧して着物着てやってるんですね。だから普通にママさんがオカマなのかなと思ったんですが、よくよく見ていくとちがうみたいなんですよ、だからこの劇でのショーパブってなんだろうっていう、パブってまず直訳すると酒場だから。酒も料理も出すからそういうスタッフさん大勢必要だから。ところがチラシを読むと、唯一の売りであったバンドマンたちが楽器ごと消えた、後に残ったスタッフは、女性シンガー、手品師とアシスタント、小道具係、漫談師、のみ。いやいや、1ミリもショーパブじゃないから。

んー。まあそこは忘れよう。ありえないけど接客&配膳&調理は全部男性漫談師一人で兼務していて、後半は彼が舞台も長時間勤めてたってことだね。むしろ演芸場みたいなノリで、かつては大入り満員の時代もあったけど、今は寂れてるってことだね。それで結局着物着た男優さん

がやってた支配人は、生物学的性別が女で、ジェンダーも女で、ヘテロな娘がいて、そんなごく普通の母娘の関係がテーマの中心にあったわけなんですけどね。じゃー普通に女優さんがやればいいし着物着る必要もないし、あえてオカマバーのママ役のムードを冒頭でかもし出す意味がわからない。

はい、そこもきっぱり忘れましょう。ぼくはこれからこの劇、すごい褒める予定ですからね。以上に述べたことは褒める前段としてこの感想を書くためにもう一度思い出してるうちにふと気付いたいくつかの小さな瑕疵に過ぎません。

クラスでねえ。たとえば中学のね。こいつおもしろそうだな、ってのと、全然アンテナにひっかからないな、っていう二種類のね。厳然かつ非情な区別というものがありますよね、新学期にね。クラス替えがあって直後に。そしてそういうのは嗅覚っていうんですか。オーディションして客観的に審査して、こいつはおもしろいから友だちになろうとかじゃないんですね。そうじゃなくて、ちょっとした会話ですでに気付くわけです、そしてその後もずっと親友でいるわけです、そうでしょ。朝野は女の人も同じで、おもしろい人しかデートに誘わないからね。おもしろさってのは、これからこの人とふたりでおもしろくなりそうだっていうね、そういう予感だから。

この劇はコメディですね。冒頭でねえ。手品師のアシスタントの女が夫の手品師の頭に水をかけて、別れると言って外に飛び出す。それを追いかけようとする手品師を漫談師が、いつものことだからほうっておけばいいと言う、すると下の階の喫茶店のウェイトレスで女優志願の女が、やっぱり追いかけるという。理由を聞くと、そのほうが盛り上がるかなと思って、つい。

おや、恋の予感？ おもしろくなりそう。そう思いましたね。その予感は当たって、細かな積み重ねのギャグが最後まで織り込まれていって、全部思い出せないけどとにかく笑った。ストーリーは時系列や因果関係でつながってるからそういう方向から思い出すことができるけど、細かく練りこまれたお笑いのところをいちいち思い出すのは難しいね。とりあえずネコの絡んだギャグは全部ウケた。たとえば、バンドマンがみんなを裏切ってショーの前日に楽器を持って逃げてしまう。その深刻な事態が判明した直後に手品師がネコがいないので探したいという。そういう系統のくすぐりはたくさん入ってましたね。それからあの置いてきぼりのバンドマンのマネージャーが偉そうで気に入らないという話になって、偉そうなのに実はバンドマンにだまされ捨てられたかわいそうな人なんだという説明、ワロタワロタ。

アッハッハ！

今思い出しても、あれ、普通におもしろいじゃん。じゅうぶんデートに誘えそうじゃん。ただのクラスメートと思っていた女の子の魅力に急に気付いて、スタンダールのいう結晶作用が起こり始めた瞬間ですね。でもその時点で振り返っても、そう言えば冒頭からそういう予感はあった。そういうふうに気持ちが笑いに向けて準備を整えてきて、そこへ次々と連発されるくすぐり、ギャグ。

全部覚えていなくてたくさんすぎてそれはしょうがないと思うんですけれども、いくつか挙げると、松風登場してトロフィーを一つ一つ見ていくところも普通に大笑いだしね。普通におもしろいってすごいことだよ。普通の人は普通につまらないだけなんだからね。だから普通におもしろいのは全然普通じゃない。これはだから普通じゃなくておもしろいってことなんだよ。H2Oclass歌うところの普通の女と思っていたけど夏の日1993ってことなんだよ。それからそ

のあとで小道具係の話を聞いていって、どんどんうれしがらせるようなことを言い続けて、最後にこの杏はと聞いて、それはただの杏だったという、こういうパターンのギャグは他にもあったはずだが思い出せないが、これは全部笑って当然。

松風旋風は続き、著名な演出家であることが判明し、忙しくて動物と触れ合う機会がないのが残念だという本人のつぶやきに、「優しい人なのね！」という突込みが入って、バカウケ。脚本書いた人に直接目を見て訴えたいが、あそこ完全にツボに入りました。おもしろいじゃねえかよ！

そのあと松風がアシカと人間の命が同等という訴えをして、あそこが爆笑のひとつの絶頂でしたね。意味と無意味の隙間をすり抜けるシュールなね。秀逸なシーンでした。当然場内爆笑の渦に包まれてるはずと思ってふとなにかおかしいと気付く。見回すと、冒頭に述べたとおり観客席も俯瞰できるし人の顔が判別できるくらいには明るいんですね。

そしたらだれも笑ってないの。なんかうすぼんやりした顔でうすぼんやりしてた。ほんとゾツとしたね。その時点で振り返っても冒頭からずっと周到な細かい笑いどころが満載で、最初から笑い声が出て当然のところをずっと静かで頭の片隅でなんか変だなというのをずっと感じていて、大爆笑のシーンで突然気付く。観客席が冷たく静まり返っていることに。ふとなんの脈絡もなく動物農場という言葉が思い浮かんだ。読んでないけど。それから思いついたのは、今年3月の官房長官の記者会見で、フリージャーナリストが、メルトダウンしてるんじゃないですか、プルトニウム飛散してるんじゃないですか、と質問して、ところが記者クラブの記者たちは一切そういう質問しないしあまつさえフリージャーナリストに黙れそんな質問するなと暴言を吐いたという。おれもそんな感じで大笑いすることがはばかれるような奇妙な圧力を感じた。3.11以降、日本は安全でなく、自由もなく、そしてジャーナリズムもないとわかった。そして今日、そのフリージャーナリストと同じ孤独を感じた、日本には、普通のユーモアを感じて普通に笑う普通の人間らしい感覚もないのだ！

なんだ今日の観客。なに、あれ、なんか今、全国でウスラバカ選手権が行われていて、その東京地区で勝ち残ったウスラバカ四十名がたまたま今日の劇場に招待されてたの？

あのね、こういうこと書くとね、そしてもしおれがツイッターしてたら、「バカですか正気ですか？ 笑いは人それぞれなのに、まさか、あなたは上から目線で他の観客全員を全否定してるんですか？」とリツイートしてきそうなのでまだツイッターやってないけどあらかじめお答えしておきますけど、そうですそういう意味ですはっきりそう言ってます。

小道具係が松風に未来のビックリ箱ですと言って、それを松風が開けると、中の人形の頭が横に引っかかって飛び出さなかった。そんなどうでもいいところで前列の女性約二名が少し笑った。それがおれ以外の観客が笑ったほとんど唯一のシーンだったと思う。おい、そこのふたりこっちこい。今から一時間膝詰めで説教してやる。本気でそう思いましたね。ほんと今日の観客は最低だった。19時開演のほうに行けばよかったのかな。

政府が悪いだのマスコミの官僚の責任だという前に、こういう一般市民のリテラシーが極度に低

いことが今度の福島原発人災の真の原因ですよ。

まあそういうわけで、お笑いの側面だけに絞って書いてきましたが、あ、言い忘れたけど、漫談師のネタの天井（二段重ね）とかも十分おもしろかったです。それで、冒頭で暗示された母と娘の葛藤が結末で和解に至り、ミューズの女神が降りてきて手品師カップルが元の鞘に収まり、女優志願女が新しい仕事を得て終わり、白い鯉節と白い雪とか、そういう全体の構成がきっちりしてるし、というのも、伏線と伏線の回収ということでいえば、それは必須でもおもしろさの絶対条件でもないと一方では思うけれども、そのあたりあまりにもいい加減すぎる日本のテレビドラマやら邦画やらをさんざん見てきたので、これまで四回の東京の小劇場ではおしなべてそういうところが律儀に回収されていて、真面目だなと思いますし好感度上昇しますし、両者は同じ日本人なのかなとすら思うよね、東電の会長がおれと同じ日本国籍持ってるという不愉快。

日本には二つの未来がある。ひとつは、原発問題が収束せず日本そのものが終わってしまう未来だ。そのような未来がくるとすればそれは、福島の子供たちに20ミリシーベルトの被曝をさせてかまわない、そしておもしろいものを見ておもしろいと感じられない、そのふたつは同等だ、そういう人間としての人間らしい普通の感情を日本人全体として十分に持てなかったということに原因があるのにちがいない。そしてもうひとつの未来は、原発問題をなんとか克服し、いずれザ・チェリーガールズのユーモアが正しく評価される未来だ。私は後者の未来にかける。

Q 35.75105304,139.7064603



東京都板橋区氷川町4 6-4



東京都健康長寿
医療センター

区立板橋第一中学校
文

板橋稅務署

板橋
區役所前

板橋区役所
新館(北館)

板橋JCT

又ツ四
点差交

四ツ又
交差点

大山束町

大山東町

大山東釘

板橋軍
局前

子易神社前

大山金井町

クオリティ
大山

東武東上線

検索

經路

あの赤服の人が際立ってヘタクソでしたね。客が客席でぼんやり見てるだけですぐわかることを演出家が気付いてないなどありえない。とすると、内輪の人間関係の都合だけで、役者志望でもなく役者としての勉強もしていない人を舞台に上げたってことかな。それは客に対して失礼だし演劇に対する冒瀆だ。

けれどもこの役者が下手だったというのが、役者個人だけの問題ではなく、妙に脚本とシンクロしているんですね。この脚本のだめさ加減とこの役者の下手加減がいい感じで共鳴しあって全体をより強くぶち壊してるわけですよ。

脚本になんの才能も感じられませんでしたね。こんなレベルのもの何本書いたって上達は望めないからやめたほうがいいと思うよ。

あのね。朝野十字はチョー優しいからね。おれ、二十代のころ付き合ってた女に、仏様みたいって言われたことあんよ。すごいしょ。ビンビンの二十代にしてすでにそうだったんだよ。それぐらい底なしに優しいからね朝野は。だからYA-Link9のどこがどう才能ないかこれから懇切丁寧に説明してあげますよ。

まず赤服さんの演技がテレビでお笑い芸人のやるコントみたいだなと感じたんですね。他の人たちがそれなりに腹式呼吸的発声とか演劇的抑揚のつけ方をがんばってやっていると、独りだけ色合いのちがうことやると、そこだけ無駄に目立って観客の気持ちがそがれますね。

テレビでよくやってるところのコントでは、わざと演劇的な発声とか表現とかを物真似して、そのわざとらしさを笑いにもっていくことってありますよね。だれだっけあの。ジャック・バウアーの物真似の誇張とか。いや、ジャック・バウアーはテレビの申し子で舞台劇じゃないので不適切な例示かな。

赤服さんは、そういうコント的誇張かそうでなければ素な発声かどっちかで、どっちも浮いてました。ミク役さんはちがいますよ。彼女は素で淡々と話す感じを出す役だから。まあ劇場が大きいと声がとどかなそうとは思いましたが。

赤服さんが参照しているのが、テレビのコントで、それなら素で話すのありだというね。紳助竜介が出てきたとき若者の素の表現ができているといった評価ね。けれども他の役者さんが演劇をやろうとしているときに独りだけそれやると浮いちゃうだけだからね。全然技法としての意味がないから有害だから。あと、赤服さんが参照しているだろうなのが漫画的リアクションね。でも

これは脚本とのからみでやってるから脚本からしてかんちがいしてるということなんですけどね

。

全体プロットとしては、主人公がヒロインを助けられなかったという記憶を持っている。そういった夢を何度も見る。そして夢の中で過去に戻って、今度こそ助けたいと思うけどまた失敗するということが続く。後半で、幼馴染の友人だと思っていた女の子が実は未来の自分の（養子の）娘で、彼女がタイムマシンでやってきて、主人公がヒロインを助けられるように算段する。最後にその理由が明かされて、主人公はヒロインを助けられなかったことを悔いつづけ、タイムマシンを研究してそれを完成させる。養女の娘は父の無念を晴らすため、過去に戻って彼がヒロインを助けられるようにしたのだった。しかしその結果未来が変わってしまい、彼女は消滅してしまう。それでも愛する父のため彼女はそうした。結果、主人公とヒロインが結婚して、その第一子が女の子で、彼女にパラレルワールドで養女であったミクという名前をつける。

んー。タイムマシンを発明した父親が自分で過去に戻らなかったのは、養女の未来が変わることを恐れたからかな。それも変だよな。一生かけてタイムマシン発明したくせに。でも養女は自分が存在しなくなっても養父を助けたくてタイムマシンに戻ったってことかあ。変な話だね。パラレルワールドで養女だったミクが、新しい未来で主人公の本当の娘として誕生したかどうか説明されてないしね。説明されたらされたでやっぱり辻褄あわなそうだしなあ。

全体、後半に入ってから急にタイムマシンを持ち出すことが危険すぎる。夢オチのなにが禁則かというと、今まで一生懸命解読してきた読者の努力を無駄にするからである。だから後半で突然タイムマシンが問題を解決ってことになる、前半の葛藤を読み込んできた読者が、今までのおれの努力はなんだったんだと腹を立てたり無力感に落ち込んだりする危険があるわけだね。まあぼくは個人的にサイファイ設定に非常に甘いので謎の理由がタイムマシンだったと言われたときの無力感は一般の人よりはずっと低いからそこは今回はスルーしますけどね。

ただそこらへん脚本家がストーリーを考えるときの考えが浅いっていうシグナルだと思うんです。ただのアイドルオタクが恋人が死んだことを後悔してそこから研究始めてそれでタイムマシン発明したって、ドラえもんの都市伝説かよ。設定ができの悪いギャグマンガ。

そしてなんとアイドルオタク主人公の恋人がそのアイドル本人なんだけどね。まず主人公がアイドルが死んだ現場に遭遇して、そのショックで意識だけが過去に戻って、まだ死んでないアイドルに、あんたはこれから死ぬという予言をして、それをアイドルがだんだん信じてきて、未来を変えるために彼をスタッフとして雇って自分の身近に置くようにする。そうやって何度も過去に戻るうちに親しくなっていく。突っ込みどころ満載なんだけど、じゃあ、最初に主人公がアイドルの死の現場に遭遇する原因はなんなの？ それは偶然なの？ 因果関係が逆立ちしてるだろ。

主人公がヒロインを深く愛していて、だから彼女の死を回避したいという気持ちになり、そのために葛藤が始まるという順番だから、最初に主人公がヒロインを愛しているというシーンが読者に示されなければならない。ところが、冒頭のシーンでは、ヒロインの死の現場に遭遇した主人公が、友人の赤服ミツルに見つかって、自分が殺したと思われて、慌てて逃げ出すんだよね。つまりこの時点ではまだ主人公の側もヒロインを本当には愛してなかったという表現だね。しかしそう考えると因果関係の辻褄が合わなくなる。だからこれは単に演出が杜撰であるだけだとも解釈できるね。そういう杜撰さは随所にあって、たとえば何度目かに過去に戻ったときに、どこかで悲鳴がして、主人公が慌ててそっちのほうに走り去る。その後をミクが追う。一人残されたミツルが、おいおいどこへ行くんだよ、という演技をしてから、しかたないなあという態度で後を追いかける。いやいや、すごくおかしい。同じ場所にいたんだからミツルも悲鳴を聞いているはずだしだから主人公がそっちに行くことをいぶかしがるわけがない。

要するに、その場限りの雰囲気演出してるとしか思えないんだよね。アイドルの死の現場に居合わせたのを友人が発見という状況からのみ連想して主人公が慌てて逃げるシーンをくつつける。主人公が突然走り去るという状況のみと関連させて、友人がいったんいぶかしがってから後を追うという小芝居をくつつける。そういう極端に浅い考えで作ってるとしか見えない。そのくせ、主人公は恋人の死を強く悔やんでタイムマシンの発明に没頭していたから一生独身で、でも彼を助ける娘が必要だから養女ってことにするというね。そういうどうでもいいところだけは妙に理屈付けしてね。あのね、なんでタイムマシンの発明に没頭してる独身男が養女を迎えるんだよ。しかもそんな小細工設定のせいで、血のつながらない娘が自分の命を犠牲にしてまで助けに行くというね。そういうところは気にならないんだ。へえー、そうですか。じゃあ聞くけどね、なんで主人公はウソをつくのが下手で、養女もウソをつくのが下手なの？ これは血がつながってるって演出だよね。最初はそのつもりで書いてたんだろうが。ところが恋人の死を悲しんで独身を通したって部分だけに急にひっかかって、あとから養女ってことに変更したから辻褄が合わなくなるんだよ。

ていうか、そもそも養女であるなら未来が変わっても単に主人公の養女にはならなかったってだけで存在が消滅にはならないんだよね。にもかかわらず、存在の諸滅というタイムパラドックスを葛藤するシーンがある以上、養女でなくて実の娘だという設定が作者の頭の中にずっとあったことはまちがいないね。では、そもそも実の娘だったのが正しい未来で、まちがって養女になったのだろうか。しかしそう考えようとすると、それをなぜ養女のミクが気付くかの説明がない。だから、実の娘のつもりでシーンを思いついて書いていくうちに部分的な矛盾にひっかかってお気楽&手軽に養女にしてしまったというのが真相だろうと断じざるをえないね。迂闊にもほどがある。

脚本が独りよがりである。普通の感想ならそう言い放って終わってしまうところ、脚本が独りよがりとは具体的にどういうことか。親切的な朝野はそこから先を説明してあげますよ。

それは結局ね、作者の頭の中でのみ自明のことを劇中で説明しないということなんですよ。観客は主人公がヒロインを愛しているということを知らない。だから彼が後悔しても共感できないし、なぜ彼女を助けようとするのかわからない。冒頭で描かれるのは、アイドルオタクの主人公と友人が、アイドル本人に偶然会って、マンガチックに盛り上がり、一方アイドルは、高飛車で見下した態度で立ち去っていく。こんな言葉足らずなシーンからボンクラ主人公と高嶺の花アイドルの純愛が始まることを予感することは到底できない。

しかし見終わった後でこうやっていちいちストーリーをトレースしていくと、このふたりが純愛ってことじゃないと辻褄が合わないし、だから脚本家の頭の中では、読者に示す必要もないほど当たり前のこととして無意識のレベルの中にそれがあるんだろうなあと気付く。

しかしてこのアイドルのキャラ設定がね。いつの時代の話なんだっていう。気持ち悪いマネージャーが、おまえに投資したんだからおれのいうこと聞けみたいなこと言って、アイドルが、私はかごの中の鳥じゃないと叫ぶ。30年前の藤子不二雄の短編漫画みたいなシチュエーションで、しかもこういうシチュエーションやモチーフに対する愛がまったく感じられない。大阪だったらたこ焼き、静岡だったら焼きそば。じゃーアイドルだったらかごの鳥でキモいマネージャー添えとけばいいかなーくらいの安直さが透けて見える。キモいマネージャー略してキモマネ役の役者さんは与えられた役を一生懸命やってましたよ。ただ脚本がコントなので役者が真面目にやるほど笑えてくるんですね。

主人公の名前がミノルで、友人の赤服がミツル。もうだめですね。シナリオ教室の一日目一時間目に、講師が、主要登場人物の名前が似ていてまぎらわしいのはだめですよ、と教えてくれますよ。だからそういう基本をまるで勉強してないってことだね。そう思ってチラシを見ると、登場人物の名前が全部「ミ」で始まるんだよね。

不真面目だ！ 観客と向き合って観客を楽しませることだけに専念していれば、こんなどうでもいい名付けのところで遊ぶ暇など絶対ないはずだ。

シーンの切り替えが妙に早くて、これはテレビドラマのカメラの切り替えの模倣だ。しかもそれを意識してやっているようには見えず、無自覚に参照しているようだ。登場人物のキャラがアニメっぽいのも設定がマンガっぽいのも、脚本家が参照している世界が、自分の好きなテレビドラマやアニメマンガなどの狭い範囲だからで、そういうモチーフを無自覚無批判に自分の作品に持ち込んで、小さな薄っぺらな世界を作り上げている。

ところで、アニメと言えは宮崎駿ですね。ものすごくうろ覚えですが、創作のときに自分の心の底の無意識の領域を探るみたいなこと言ってました。じゃあ宮崎駿の無意識の奥底には何があるかということ、こっちもうろ覚えですが、映画評論家の町山智浩が、千と千尋の神隠しの裏側には、湯屋で働く湯女のモチーフがあって、これは江戸時代の売春婦のことだそうで、ドストエフスキーの小説にもバルザックの小説にも娼婦が聖女と二重写しになるものがあるけど、そういったモチーフへの共感があったとか。つまり宮崎駿にはそういう教養があって歴史観があって、無意識の底から出てきた湯屋や湯女のイメージが昇華されて千と千尋になったってことですね。

ところが、ぼく自身がそうなんですけれども、教養も世界観もない凡庸な人間が無意識を探っても、そこにあるのが宮崎アニメだからね。われら凡人の心の原風景が、もののけ姫の深い森であり、ナウシカの腐海だから。だからそういうぼくみたいなのが無意識のイメージを無自覚無批判にまさぐって小説を書くと、自分の好きなドラマやアニメを無自覚に模倣して、模倣しているという事実すら気付かないままつまんない二番煎じを書いてしまうんだね。そういう自分の体験から類推するに、この脚本家もぼくと同類だと思う。だから全体としてぼんやりとしてオリジナリティが感じられないんだよ。

想像だけれども、たぶん主人公が恋人の死に寄り添う冒頭のシーンは、作者にとって印象深いシーンなんだろう。それを印象深く記憶させた体験が作者にはあるのだろう。それはおそらくリアルな体験ではなくてそのような題材を扱った先行作品なんだろう。だからそのシーンがおもしろかったよ、印象深かったよ、ということ自分の劇中で言っているのだろう。それは読者にとどまり感想を述べているということなんだよ。そのシーンがなぜ自分にとって大事かということ自分をひきつけて自分自身のモチーフとして深く考えるところまで到ってない、そこが無自覚なんだよ凡庸なんだよ、説明が足りなくて独りよがりになる原因だよ。

もちろん作者が好きな作品をリスペクトしオマージュすることは当然あるんだよ。でも読者と同じレベルで好きだなあおもしろいなあと思ってるだけじゃ作品をお見せする立場には立てない。

上を目指す人は、他山の石、以って玉を攻むべし。

Q 35.7567358,139.6961626



検索

経路



ヒューヒュー！ ヒューヒュー！ チェーホフ！ チェーホフ、ヒューヒュー！ 今夜はアントンでサタデーナイト！！ フィーバー！ フィーバーナイト！！

チェーホフかっこいい。かっこいいチェーホフガチかっこいい。チェーホフのかっこよさをここまでわかるおれってかっこいい。

というわけで、今日(2011/11/19)は、三人姉妹を見てきました。いやー普段からチェーホフ好き好き言っときながら、実はまだ小説全部読んでないんですけどね。それどころか、戯曲はひとつも読んでないし観てない。それでも一を見て十を知るちがいのわかる男、チェーホフかっこいいと思う朝野十字はかっこいいって話はもういいですか、そうですか。

というわけでリターンズ、チェーホフ初観劇で朝ちゃん感激！ やっぱこの戯曲とかシナリオとか文字で読むの大変だしね。それを近場で上演してくれるっていうことなら、もちろん見に行きますよ。

泣いてしまう。六号室のラストのダーリュシカで泣いてしまう。中二階のある家のラストで中二階のランプが消えたところで泣いてしまう。シェードがかぶせられた時点で号泣する準備はできていた。泣いてしまうチェーホフ泣いてしまう。チェーホフかっこいい。おまえほんとにかっこいいよ。なんでそんなに才能独り占めなの。すごいすごすぎる100年に一度の天才真に神に愛された。

すごいなあ。三人姉妹もね。しまいのね、次女が泣くシーンでね、しまいには泣いてしまうね。鼻水出まくりですよ。目頭を押さえつつ劇場を出たら外は雨。劇場内では人目があつたので我慢してたけど、中板橋の駅まで歩いている間もどろどろ涙が込み上げてきてね。鞆持って傘さしつつ、ズボンの後ろポケットからポケットティッシュ取り出しては鼻をかみ鼻をかみ帰りましたよ。

チェーホフかっこよすぎる好きすぎる。どうやって思いつくんだろうあのモチーフこの設定。チェーホフ万歳！ ロシア万歳！ 東ローマの正統な後継帝都モスクワ大万歳！

プロットをたどると、冒頭で、三女の誕生会が行われる。三女はこれから仕事を持ち働くと言い、労働が尊いという。二女は夫とうまくいってないようだ。長女は教職にたずさわる聡明な女性である。将軍だった父が生きていたころは誕生会ももっと華やかだったとは言うものの、それでも大勢の人たちが三女の誕生日を祝いにくる。パーティのさなかに三人姉妹の兄アンドレイ（正確には長女と二女の間に生まれたらしい）が地元の娘ナターシャにプロポーズする。

場面が変わって、ナターシャはアンドレイと結婚して子供をもうけ、屋敷の女主人になっている。長女オリガは学校の仕事が忙しくほとんど家にいない。二女は駐屯している軍隊の砲兵隊長ヴェルシーニンと不倫している。朝野は指を折って数えていたのでまちがいないが、ヴェルシーニン役の方は冒頭で三回台詞をかんだよ。三女は電信局に勤めているが、忙しくて疲労困憊している様子で、仕事がつまらないと愚痴をこぼす。アンドレイは大学の教授になることを囑望されていたが、現実には県議会の書記。この先もライバル視しているだけだっけ？ そいつは議長になるだろうに自分はせいぜい県議会議員だろうと嘆く。結婚前はおずおずして控えめだったナターシャはなぜか自信満々になり、屋敷を仕切ってアンドレイが羨望するプなんとかって議長と浮気する。

後半、町で大火事が起こって、オリガは屋敷を開放して焼け出された人たちを介護する。ナターシャは女中の老婆に辛く当たり、低俗な品性をさらけ出す。屋敷に下宿している軍医のチェプティーキン、医療ミスで患者の女性を殺してしまい、酒を飲んで愚痴をこぼし、なにもかもどうでもいいと言う。二女のマーシャは、長女オリガ三女イリーナに不倫を告白するが、オリガは耳を貸さない。現実には耐えられず自分の中に閉じこもってしまったオリガとイリーナの前に、今度はアンドレイが現れて、ナターシャを褒め称え、オリガとイリーナがわがままだと決めつける。アンドレイが去った後、イリーナは、尊敬しているが愛してはいないトゥーゼンバフ男爵との結婚を決意する。

駐屯していた軍隊が町から出て行くことが決まった。イリーナは男爵との結婚を控え、再び働く意欲を持つようになる。マーシャは不倫相手の軍人ヴェルシーニンとの別れを嘆く。男爵はイリーナに横恋慕していたソリョーヌイに因縁をつけられ決闘することになる。イリーナに愛されていないことに気付いていた男爵はイリーナに別れを告げ決闘に赴き死んでしまう。

しかしこのようなプロットをたどるだけではチェーホフはわからない。マーシャはモスクワに憧れていてモスクワから来た四十過ぎの優男ヴェルシーニンとひとときの不倫をしていただけであり、彼女の夫はそれに気付きながらもマーシャを許すできた男であり、そのようなプロットからはマーシャへの同情が導き出せない。ところがラストのマーシャの不定愁訴的錯乱ぶりを見て、私は確かに泣いてしまったのである。このキルケゴールの感動の前に、ヘーゲル的プロット解析などまったく無力である。

ヒューヒュー！ チェーホフ、ヒューヒュー！

プロットは万能ではない。原子力発電所も万能ではない。そのことを謙虚に思い知るときがきた！ プロットはダース・ベーダーのようにデス・スターのように強力に強大だが、フォースだ、フォースを信じるのだ。そのとき、プロットもまたモチーフの一種でしかないと気付く。

てか、この話どこからどうやって説明しても硬くなっちゃいそうなんだけど。いいかな。たとえばイオーヌィチという掌編があるよね。主人公イオーヌィチは俗物だ。彼が交流する家族も俗物だ。その家の娘は身内から猫ちゃんと呼ばれ甘やかされていて、自分にはピアノの才能があると自惚れていて、イオーヌィチの求婚を断って都会の音楽学校に進学するが、何年も経ってようやく才能のないことに気付いて家に戻ってくる。そのときイオーヌィチはすでに若いころの情熱を失っており、内心彼女と結婚せずにすんでよかったと思う。結末にチェーホフはこう述べる。

彼は孤独である。来る日も来る日も退屈で、彼の興味をひくものは何一つない。

彼がチャリージに住むようになってから今までを通じて、猫ちゃんに恋したことが後にも先にもたった一つの、そして恐らくはこれを最後の喜びごとであった。

イオーヌィチ（青空文庫）

<http://www.aozora.gr.jp/cards/001155/card43647.html>

このプロットが指し示しているのは俗物イオーヌィチの喜劇的末路であり、地の文にもそのように指示されている。従ってプロットがテーマを指し示していると考える限り、これはつまらぬ人物のつまらぬ人生を描いた作品だということになる。そして小説の価値を内容だと勘ちがいするとき、この小説の内容はつまらぬ内容である。しかしながら、この小説から読者が受け取るのは、決して内容ではなく、「たった一つの喜びこと」の輝きである。もちろん文学的感動とは常にそうなのだ、テーマの正しさでもなく主人公の善良さでもない、そうではなくて、いわく言いがたい「輝き」それ自体である。この小説はその輝きを確かに持っている。

モチーフとそれが象徴する意味がちがうことはよくある。たとえば銃が示されたとき、それが暴力やある男の暴力衝動を象徴しているとか、そういうことである。モチーフとしての銃が銃としての現実的意味をまるで持たず、銃を持つ男の暴力衝動を象徴する道具でしかないとき、読者は銃の現世的意味を気にせず、人間の内奥に潜む暴力衝動に焦点化する。そのような象徴性は、チェーホフに限らずどの文学にも普通に見られる技法である。そしてプロットもまたモチーフであると気付くとき、文学世界はさらに無限の広がりを見せる。

三人姉妹に於いて、プロットがマーシャへの同情を指示しないこと、にもかかわらず一観客がマーシャの悲憤に強く共鳴したことはすでに述べた。そのような輝きの発見から逆算して考えるとき、マーシャがずっと年上の田舎教師の夫に幻滅したこと、モスクワの優男に恋したこと、そ

のようなプロットもまたなにがしかの象徴性を担うモチーフのひとつに過ぎないのであり、象徴性喚起のために使われている技法でしかないのだから、そのようなそれ自体すなわち夫への幻滅とか浮気とかの現世的意味を気にする必要はないと気付く。

三人姉妹が夢見ていたモスクワでの生活やアッパークラスとの結婚、あるいは兄が大学教授になることなどはどれも実現しなかった。しかしそのような無邪気な子供っぽい夢は後から振り返ってみれば別に崇高でも知的でもない。一方で現実はどうだろう。イリーナは仕事に疲れ果て、オリガは望んでいなかった学校の校長になり、マーシャは結婚当初ほどは夫を尊敬できない。アンドレイは大学教授になれなかった。しかしこれはそれほどひどい現実だろうか。イリーナは最後には意欲を取り戻すし、だから仕事に不満を持ったとしてもそれはいつときのことだった。オリガは結婚できなかったが、仕事では成功したと言っていいだろう。マーシャはどうだろうか。夫のクルイギンは繰り返しマーシャを愛していると言い、自分は幸福だと言う。なぜだろうか。私が思うに、それは実際そのとおりだからだろう。彼は安定した職を持ち、知的な好奇心を持ち、著作もあり、そして若く美しい妻を持っている。アンドレイもまた自分が幸せであると言う。県議会議員の職に誇りを持ち、ナターシャを愛していると言明する。やっぱそれは実際そうだからじゃないの。そこそこうまくやってるよ。

ナターシャの低俗とオリガの高尚の対比もそんなに懸隔があるわけじゃない。三姉妹は屋敷を出て行き、ナターシャが独りで家を切り盛りしているのだから、彼女の意見が強くなるのは当然だろう。ナターシャがいじめた女中は、オリガと一緒に学校の施設に住むことになり、幸せになってよかったじゃないか。

三人姉妹の冒頭と結末では、その経済的境遇、人間関係において、あまりコントラストはない。三人姉妹はより不幸になったと言うほどではなく、むしろ改善された部分もある。え、なに？

トゥーゼンバフ？ トゥーゼンバフがどうかしたの？ トゥーゼンバフなんか端役なんだから気にしなくていいよ。それより重要なのはヴェルシーニンだ。だからヴェルシーニン役にはうまい役者を当てるべきだ。ヴェルシーニン役の人、髪型も体の動きもなんかちょっと変だったよ。おれが演出家なら、トゥーゼンバフの役者とヴェルシーニンの役者の配役を逆にするね。髪型なんか舞台の前日に美容院行けばすむ話だしね。

そのヴェルシーニンが、ええっとなんだったか忘れた、家が火事になったんだっけ。それで二人の娘を両脇に抱えて逃げ出して、逃げてるときに、つくづく思ったそうな、この娘たちがこれから困難な人生を生きていって、どれほどの悲しみを受けるだろうかと嘆いたそうな。おやおや、この唐突なモチーフの登場は全体なんなんだろうかー。

まず基本戦略としてすべてのモチーフは密接に関連しているということが前提である。でなければひとつの作品を読解するという行為自体が無意味になってしまうからである。読解し解釈しようと決めた時点でそれは自明の前提である。そしてモチーフのイメージは、類似、対比、修飾、並立といった対応関係を持っている。さてそうすると、ヴェルシーニンの二人の娘と三人姉妹は、姉妹という類似を持っている。また、まだ苦勞を知らない無垢な若い娘と、すでに生活の苦勞を知った成人という対比を持っている。修飾関係で言えば、当然メインの三人姉妹をヴェルシーニンの娘が修飾しているのだ。そしてこの二つのモチーフは、共に幸福な娘時代と成人後の苦難の未来を持つという意味において並立している。つまりはそのようなパースペクティブを作るためのモチーフだ。

三姉妹のモスクワ時代は直接描かれないのでこれを未知のXとしよう。未知のXは間接的には言及されて、複数の語学を勉強したとかピアノを習ったとか。次に冒頭のイリーナの誕生会では、楽しいパーティーの様子が描かれ、アンドレイがナターシャにプロポーズするロマンティックなシーンで締めくくられる。その次は、長女も三女も仕事に追われてほとんど屋敷におらず、その次は大火事の混乱、ラストは駐屯していた軍隊が去っていき、三人姉妹全員が屋敷を出て行く。そうすると、このようなパースペクティブから、現在を射影として三人姉妹が一緒に暮らしていた光源X時代を想像することが可能だろうと気付く。そしてイリーナが繰り返しモスクワモスクワ言うのは、これからこの先にモスクワへ行く話なのではなくて、以前のモスクワ生活すなわち未知のXを指示しているタームだと理解される。

具体的には、冒頭で長女と三女は屋敷に住んでおり、二女も屋敷にやってくる。一方結末では、長女は学校に住むようになり、三女は煉瓦工場で働くため家を出て行き、二女は浮気相手と別れて夫の元に戻るの、三人とも屋敷から出て行っていなくなるわけである。この二点を結んで過去へ向けて外挿を延長すれば光源Xが特定できる。こうして光源Xでは三人姉妹がモスクワで一緒に住んでいたということが数学的に証明された。さらに三人姉妹がモスクワで一緒に暮らしていたことは冒頭で間接的に言及されているので、このパースペクティブ設定と計算方法が正しいことも証明された。

プロットが未知のXに目を向けるよう読者に促していることがわかった。だから未知のXはこの作品のテーマ性を象徴するような何かだ。しかし、オリガについて冒頭と結末の二点を取ると、働き者の真面目な教師のままだ。マーシャは冒頭で不倫しており、結末で別れるが、モスクワ時

代は不倫していなかった。イリーナは、最初も最後まで労働の尊さを語っている。ひとつひとつよくよく見てみると、実は三人とも際立った変化がないすなわちテーマ性を汲み取れないように見える。これはサスペンスドラマの手法に似ている。解明されるべき犯罪をほのめかし、いかにも怪しそうな登場人物を登場させ、ひとりひとりについて、犯人ではないという証拠を示して、読者を宙吊りにする技法だ。ちょうどそれと同じように、未知のXがテーマだとほのめかし、三人姉妹それぞれにちょっとした変化をつけて、労働とか結婚とか不倫とか田舎暮らしとかのどこかにテーマがありそうなそぶりをみせつつ、実はどれもテーマというほどのものではないと捨て去っていく。アンドレイの賭け事は家を破産させるまでには到らず、ナターシャの暴君ぶりも、三人姉妹のほうが家を出て行くことによってなんとなく下火になってしまう。

実はこれはモチーフを深く味わうことをさせるためのチェーホフお得意の技法なのだ。読者は、いつも上から目線で作品を見渡し、で、何が言いたいんだ？ テーマはどれなんだ？ と考えつつ作品を見ている。そのようなスノッブな読者に向けて、チラチラとドレスを揺らし、スカートを持ち上げたり下ろしたりして踊るダンサーのように、テーマらしきものを出したり引っ込めたりしながら、読者がモチーフのイメージにどっぷりつかるとのをチェーホフは冷静に計算し待っているのだ。

三人姉妹の結末まで到ったとき、私たちが埋没しているイメージとは、冒頭の華やかで無邪気なイリーナの誕生会とロマンティックなアンドレイのプロポーズのイメージがひとつ。もうひとつは、苦い人生の中で無感動になりすっかり疲れてしまっているイメージだ。その極北には、記憶を失い自分の肉体の感覚さえ思い出せないチェブティーキンのモチーフがある。チェブティーキンを極北とし、中間点に賑やかでロマンティックで浮き浮きとしたイリーナの誕生会のイメージを置き、その先に輝く未知のXを見るのだ。

このイメージのコントラストは、先に触れたイオーヌイチでつかわれているのと同じ技法だ。現在の孤独と寒々しさを描けば描くほど、そこから読者が汲み取るのは、過去の生き生きとしたロマンスのイメージなのだ。生き生きとした瞬間が心底いとおしいと気付くのは、その瞬間ではなく、その瞬間のたとえば子供のスナップショットを撮影して、印刷して、額縁に入れて壁に飾って、それを見るときだ。つまり現在の寂しい悲しい辛い状況が、額縁の役割をして、過去の一点の美を客観視し、その価値尊さ一期一会さをしみじみと理解する視点を読者に与えているのだ。現在が暗く寒々しいほど、それをテコとして、その対極にある過去の一点が強く輝き出すのだ。

なるほど、未知のX時代に、三人はモスクワに住んでいた。アンドレイの出世だの幸福な結婚だの文化的都会的生活だのの子供っぽい無邪気な夢を持っていた。そして彼女たちは結末でそれらを失う。けれども、劇が進むにつれ、それらがテーマというには軽々しく劇的さを欠く凡庸なモチーフであることがだんだんはつきりしてくる。ナターシャも不倫しており、それはいかに

も薄っぺらでつまらないモチーフだ。そしてマーシャももまたナターシャのように不倫しているのである。ヴェルシーニンのような軽薄な優男がマーシャを奪ってモスクワに去るなど想像もつかないし、実際この男はなんだかんだ言ってマーシャを捨てて去って行くだけである。だから未知のXを指示するモチーフではなく、そうではなくて、これは未知のXではない、とプロットは読者に指示しているのである。このような否定の積み重ねを通じて、未知のXは、モスクワに住むことでもなく、モスクワの華やかな都会的雰囲気のことでもなく、過去モスクワ時代に夢見た子供じみた夢のことでもないという読者が理解していく。

では、未知のXとはなにか。もうおわかりだろう。それはチェブティーキンを極北とし、その対極にある、世界を生き生きとを感じる体験それ自体である。子供のころ、世界は意味に満ちあふれていた。そよぐ風、輝く日差し、野原のバッタや小池のカエルや小川のフナを見つけるたび、その自然の神秘に驚嘆した、生きる意味は世界にも自分の中の血潮にも満ち満ちていた。しかし生活の中でそのような生き生きした感覚がいつのまにか失われ、すべては箱に詰められた郵便物のように目の前を通り過ぎるようになっていった。だからオリガの最後の言葉、「生きる意味がわかれば」というのはそのようなテーマを指示しているのである。チラシによると今回の公演のテーマは「再出発」だそうだが、それは私の言葉で言えば、再認識のことであり、だからそのような立場から、「再出発」というテーマ設定が適切であることに同意する。

いつのまにかまんまとチェーホフの計略にはまりモチーフにどっぷり漬かった観客は、哀れなマーシャを見る視座を捨て、哀れなマーシャの中に入り込み、マーシャの目線で輝けるモスクワ時代を見る。その輝きを見て、そのコントラストのあまり、それが原因で泣いてしまうのである。

ずいぶん長文になってしまった。まだ書き足りないところがあると思うが、またチェーホフを見る機会はあるだろう。そのときに譲っていったん筆をおく。

グループ・テアトロ <http://www.geocities.jp/gruppoteatro2/gruppo.html>

🔍 35.70327618,139.6269214



検索

経路



もう何年も前になりますが、朝野は「段取り分節」という言葉を発明したんですよ。これはどういう意味かということ、たとえば法月綸太郎の「雪密室」の冒頭で、青二才の若造が延々とペダンチックというのかな、頭よさげだけど別にどうでもいい蘊蓄話をし続けるんですね。でもってそのモチーフがそこに置かれたわけが次に明かされて、そいつは容疑者なんだけど、犯行時間と思われる間ずっと語り手相手にグダグダ与太話し続けていたからアリバイが成立するってだけの意味のモチーフなんだね。その時間の長さを読者に体感させればいいだけのモチーフなので、やたら長いわりには内容は心底どうでもいい。

つまり普通モチーフっていうと、テーマを暗示するとかキャラを描写するとかの機能を持っているものだけれども、そういう機能のまったくない、段ボール箱に入ってる緩衝材みたいな単にその場所を占めているだけが存在理由みたいなモチーフを発見したわけですよ。そのころ朝野は小説を分節化してその構造を探るということをずっとやってた時期でして、そこで他と区別してそのようなモチーフ、あるいはそのような一連のシーンに対して「段取り分節」と命名したのですね。何かと便利な言葉なのでどうぞよかったら使ってください。

段取り分節というのはシーン自体としての魅力がないので後から思い出そうとしてもけっこう忘れてますね。たとえばシャーロック・ホームズが急に無口になってパイプをくゆらせたりバイオリンを引き始めたら、証拠集めは終わったんだな、今推理してるんだな、まもなく犯人が判明するんだなと思いますね。そのあとで、ワトソンにどこどこへ行ってこれこれを探してきてくれと指示する。あるいは自身が姿をくらませて何かの準備をし始める。そしてホームズがいない間、ワトソンが毎度見当はずれの推理をするわけですが、それはすべてまちがってるし全然気にしないでいいわけです。その間に段取りがすんで、いよいよホームズがワトソンに銃を持ってきてくれとか、ここで待ち伏せするとか言って、そこから冒険活劇的クライマックスが始まるわけです、その手前は段取りなんでもつまらないです。

さてそうしますと、この劇を見始める前にチラッとチラシを見たら菊池寛原作とあって、劇が終わった後で荻窪駅から電車に乗って帰る途中で青空文庫に見つけまして、iPhoneにダウンロードして読み始めたらものの5分ほどで読み終わってしまうほどの短い戯曲でしたが、今回の劇は、その原作の前半部分と後半部分を台詞を含めてかなり忠実にコピーして、冒頭と結末に置き、その間に新しいオリジナルなストーリーを挟むという構成になってることに気付いたんですが、この段取りは何のためなんだろうというのをこれから考えていこうと思います。

冒頭では、原作でいう狂人である兄、この劇では悟という名前になってますが、悟が屋根に上って夕日を眺めて、七福神が見える見える言ってるのを、下にいるお父さんとこのお父さんの経営する小さい会社の従業員が見上げて、危ないから降りろ降りろと言っていました。原作では地方の

財産家とその家の下男というところをそのように置き換えてあるわけですが、長男の悟が狐に憑かれてる猿にも憑かれてるそれで高いところに登りたがるのだという財産家の父親の説明は原作を忠実にコピーしてるんですね。そして原作ではこの父親が長男を心配してお払いのために巫女をすぐ呼ぶんですが、今回の劇ではここが改変されていて、父親はお払いなどというものは信じてなくて、だから従業員から近くの有名な占い師にお払いしてもらえばいいと勧められてもその気にならないんですね。だから迷ってるだけでその間話が全然前へ進まないわけです。この劇では冒頭で原作を忠実にコピーしたために父親のほうで長々と台詞をしゃべり続けますが、実際に長男にお払いさせようと積極的になるのは母親のほうで、父親の登場はその母親の話に持っていくまでの間の段取りでしかないのですね。だから冒頭のシーンがとっても退屈なんだと思います。またこの父親役の役者さんがね。いかにも段取り台詞が上手な役者さんでね。感情のこもらないね。高田純次みたいなね、そこがおもしろいというね、だからこれはね、役柄に合ってる上手な演技なんですよ。脚本が要請している役柄が段取り奉行だからね。だから家族団欒でお母さん役が情を込めて長台詞言ってもこのお父さんが一言突っ込み入れたら瞬時に全部がコントになってしまうというね。なかなかはまり役だったですね。

さてそこで原作はたいへん短いし青空文庫に無料であるしでそれをほんの5分かけて読んでいただければこれから私が言うことのいちいちを同意していただけると思うのでぜひ5分お時間をいただいて[先に読んで](#)いただきたいんですがね。

まずタイトルにもありますように、原作では兄のほうは、狂人であるという設定なんですね。決して知的能力にハンディキャップがあるのではなくて、頭が狂ってるから空の中に金比羅さんがいるという幻覚を見るんですね。（原作の舞台は四国で神様は金比羅さんです。今回の作品では舞台を東京に移し、神様も七福神に変えてあります）

藤作　けど弟さんの末さんが町の学校でようできるんやけに、旦那もあきらめがつくというもんやな。

義助　末次郎が人並にできるんで、わしも辛抱しとんや。二人とも気違いであつたら生きとる甲斐がないがな。

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000083/card494.html>

はい、つまり原作では財産家の跡取りとして期待していた長男が気違いでどうしようもない、でも二男のほうで学校の成績優秀だから救われると父親は思ってるわけですね。そしてそういう目で兄弟を見る視点をここで読者に提供しているわけです。また、父親はこの長男を始終苦にしていると言い、自分がかつて野生の猿をたくさん駆除したために猿憑きになったのではないかと、だから高いところに登りたがるのではないかと、自分のせいではないかと思って悩んでいます。このシーンは、だからこのあと次のシーンですぐに父親が巫女を呼ぶことの理由を説明しているのですね。

次のシーンでさっそく巫女がやってきまして、長男のお祓いのため葉っぱを燃やして煙を出し、それで長男を燻すことを始めて、長男が苦しみだします。そこへ弟がやってきて、長男をかばって焚火を蹴散らし火を消します。そして父親にその理由を次のように説明します。

末次郎 お医者さんが治らんいうたら治りゃせん。それに私がなんべんもいうように、兄さんがこの病気で苦しんどるのなら、どななことをしても治してあげないかんけど、屋根へさえ上げといったら朝から晩まで喜びつづけに喜んどるんやもの。兄さんのように毎日喜んでいられる人が日本中に一人でもありますか。世界中にやってありゃせん。それに今兄さんを治してあげて正気の人になったとしたらどんなもんやろ。二十四にもなって何も知らんし、いろはのいの字も知らんし、ちっとも経験はなし、おまけに自分の片輪に気がつくし、日本中で恐らくいちばん不幸な人になりますぜ。それがお父さんの望みですか。なんでも正気にしたらええかと思って、苦しむために正気になるくらいばかなことはありません。

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000083/card494.html>

ここに明らかなように、兄思いの二男は、狂人である兄が正常に戻ってほしいとは思っていないのですね。はい、ここ、重要、試験に出ますよ。

そしてラストはこうです。

（義太郎は前の騒動の間にいつの間にか屋根へ上っていたらしい。下の四人、義太郎を見て微笑を交う）

末次郎 普通の人やったら、燻くすべられたらどなに怒るかも知れんけど、兄さんは忘れとる、兄さん！

義太郎 （狂人の心にも弟に対して特別の愛情があるごとく）末やあ！ 金比羅さんにきいたら、あなな女子知らんいうとったぞ。

末次郎 （微笑して）そうやろう、あなな巫女よりも兄さんの方に、神さんが乗り移っとんや。（雲を放れて金色の夕日が屋根へ一面に射しかかる）ええ夕日やな。

義太郎 （金色の夕日の中に義太郎の顔はある輝きを持っている）末、見いや、向うの雲の中に金色の御殿が見えるやろ。ほらちょっと見い！ 綺麗やなあ。

末次郎 （やや不狂人の悲哀を感じるとく）ああ見える。ええなあ。

義太郎 （歓喜の状態で）ほら！ 御殿の中から、俺の大好きな笛の音がきこえて来るぜ！ ええ音色やなあ。

（父母は母屋の中にはいってしまって、狂せる兄は屋上に、賢き弟は地上に、共に金色の夕日を見つめている）

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000083/card494.html>

菊池寛が括弧内に注釈を入れてくれているので、誤読のしようがないですね。兄の「狂人の心に愛情があるごとく」つまり愛情はないのですね。弟の「不狂人の悲哀を感じるとく」つまり正

常な弟には悲哀があるのですね。世俗の社会で正常な人間として生きる限りさまざまな苦難があり悲哀がある。一方、狂人の世界には神様が共にいる。ここには、世俗の悲哀と対置した狂人が見る神様のいる世界への憧憬が描かれています。そして兄を正常に治すことを断念した弟は、世俗そのものを代表しているような父親から測って、一歩狂人の側に踏み込んだとも言えます。だから彼はラストで兄が見ているのと同じ神様が見えたような気がしたのでしょう。

この原作から読み取れるテーマは明白で、辛い浮世と浮世から解脱した狂人のみがたどり着ける彼岸を対比させ、浮世の弟の目から見て狂人の兄の世界のほうが幸福なのではないか、という逆説を提示しています。しかし弟は兄の世界へは行けない。そこへ行くには現世の欲望をすべて捨て去らなければならないからです。そして家族愛とか兄弟愛とか勉学とか立身とか跡継ぎとか親孝行とかのすべては現世の側にありますから、弟はただ兄に向けて憧憬を感じ、兄が狂人のままでいることをかばい守ることしかできないのです。しかしだからこそさらに無性に、たどり着けないとわかっているからこそ、その彼岸がたとえようもなく美しく価値あるものに見えてくるのです。

一方で、今回の作品では兄弟をどのように描いているのでしょうか。まず冒頭から原作にはない祖父が登場して、長男をかわいがります。長男は近所のラーメン屋で無銭飲食したのですが、ラーメン屋の主人はそれを大目に見てやります。家族団欒のシーンでは、家族が長男のことを、正確な台詞は忘れましたが、知的能力は劣るが心根は純粹で優しいと口々に言います。また、劇の中ほどで、兄が小学生たちにいじめられるシーンが出てきて、なんて言ったかなあ、もう忘れたけど、ボンクラだったかノロマだったか物知らずだったか、そんなふうに囃し立てて、そこへ通りかかった弟が兄をかばって小学生を追い払うんですね。

さてそうしますと、これらのモチーフの意味もまたとてもはっきりしていて、兄は知的能力にハンディキャップのある障害者であり、それをいじめられるのは理不尽だから弟がかばうということなんですね。これは原作からの致命的に大きな改変部分です。

この作品では、最初からずっと仲の良い家族が描かれ続けます。弟が兄をかばうシーンが何度も繰り返されます。家族の団欒シーンでは、家族同士がお互いを褒めあい、兄は無垢で弟は優しいということを台詞で言い合います。劇の中ほどに挟まれる、小学生にいじめられる兄を弟がかばうシーンでは、その前に説明台詞で何度も聞かされてきたことが再現されているのを観客は見ます。この作品では、兄弟愛について、ハンディキャップのある兄を家族が温かく見守っていることについて、最初から最後まで同じことを何度も繰り返し言うばかりで、冒頭と結末で変化がありません。

そしてラストにまた原作の後半部分がほぼ忠実に接木されるのですが、だからまず第一に、ラストで兄弟愛を弟が語るとき、驚きがない。原作では父親に期待されている有能な弟と役立たずの兄という対比が冒頭で示され、ラストでその弟が兄をかばうことによって、価値の逆転が起こり、そこが感動を呼ぶわけですが、今回の作品ではそのような原作の技法が継承されず、最初から兄は家族から愛されまくってるだけなので、さんざ聞かされてほしいそうだろうなというところに着地して、やっぱりそうだったとしか受け取れないという問題があります。唯一葛藤っぽい母親も、ラストで賢弟に諭されると、そりゃそうだな、あたりまえだよ、母親のほうを考えが足りない、という感想しか持てないですね。

第二には、ラストで原作と同じように、「兄が正常に戻っても不幸なだけだ」と弟が言うんですね。原作でそう言うのは、原作には浮世の悲哀と対比しての狂気への憧憬というテーマがあるからです。ところが、今回の作品ではその原作の命と言っていい最も重要な部分を完全にオミットして、兄弟愛・家族愛に焦点化しているのですね。だからハンディキャップを持つ兄が、医者に見てもらっても治らないけれども、それでも家族の一員として共に生きていこうという設定なわけで、だから、もし兄が治るんだったらそれはそれで嬉しいというのは大前提として絶対あるわけです。そこへ原作の「狂気のままのほうが幸せなんじゃないか」という逆説の提示をそのま

ま接木したら、話の辻褄が致命的に合わなくなってしまうのは当然ですね。

原作の、クライマックスを盛り上げる技法を継承しなかったばかりか、その技法によって盛り上がる場所の本当はラディカルなテーマ性も改変し、凡庸な人情話を持ってきて、にもかかわらず、冒頭と結末に原作を忠実にコピーしたシーンを接木したために、プロットが、フランケンシュタインのモンスターのよう醜く、ダークエンジェルのキメラのように不憫な継接ぎ状態になってしまったのです。

では、原作の前半と後半を冒頭と結末とし、その間に入る新しいストーリーのほうはどうなるのでしょうか。

まず、若い男女カップルが悪役として登場して、振り込め詐欺で悟の祖父から金を巻き上げるのだが、実は女のほうがよくあたる占い師として有名なキャロルで、さらに金を巻き上げようとして、相談にきた悟の母親にお払いしてやると持ちかける。お払いは劇のラストまで持ち越され、そこで占い師キャロルが、実は近所のラーメン屋の主人の娘であることが明かされる。ラーメン屋は十何年も前に妻子に逃げられたのだが、逃げた妻のほうは体を壊して死んでしまい、娘のほうは水商売しながら暮らしていた。そしてキャバクラで知り合ったバーテンダーと組んで偽占い師をやっていたのだった。で結局、娘は父親の元には戻らずまたどっかに逃げ出しちゃうのだけど。しかもそれ伝聞情報なの。クライマックスのお払いシーンが終わった後で、母親と父親だったか祖父だったかが二人で登場して世間話を始めて、その中で、キャロルは町を出て行って行方知れずだという話をするのですね。新しいストーリーの中心にあるはずのキャロルの人生がまるで他人事のまま捨て去られる。そしてとってつけたように、ていうか文字通りとってつけてるとしか思えないのだが、でも弟のほうにキャロルとメールでやり取りしているらしいですよと母親がつけくわえる。なんじゃそりゃ。プロットがすごいキャロルに対して冷淡ですねえ。なんのためにさんざんキャロルの話をここまでひっぱってきたんだっていう。

でもまあ話の辻褄はあってます。冒頭でラーメン屋が昔妻子に逃げられたという話をしてそれが伏線で、大枠で大草原の小さな家的に楽しく暮らしている悟の家族に対して、家庭的不幸を背負った娘が復讐しにくるというね。幸せな家族糞食らえという憤怒ね。それがチラッと出てすぐ引っ込んじゃうんだよね。そうそう、もうひとつストーリーラインがあって、悟の父親が経営する零細企業の社員の女と男がいて、ラストで男が女にプロポーズするというね、ラストの結婚って、今まで7回観劇したうち、半数くらいで使ってるよこのモチーフ、19世紀大衆小説でさんざ使い回されていまだきの小説では絶対使わない手垢モチーフが演劇界でこうも生き残っているという、しかも古典のチェーホフとつかこうへいでは使われず、今の若い人がやってる劇のほうで何度も使われてるんだね食傷。

はい、話を元に戻して、だから原作と新しいストーリーが、モチーフもモチーフのイメージも全

然無関係なだけでなくテーマが背反しあってるんだね。今回オリジナルの新しいストーリーでは家族愛プラスアルファ家族愛糞食らえキャロルが悪役で登場なわけだけど、原作ではそういうのまとめて世俗で、それへの軽蔑が滲んでるよね。菊池寛とその時代について調べなくとも、つまり調べてないけれども、この原作では狂気が芸術至上主義のメタファーとして使われていて、菊池寛が、おれ芸術わかる男ね、でもっておまえら観客は世俗のクズね、と言ってるらしいことが容易に予感できる構成になってるわけです。このような原作に材を採って、大家族万歳物語@地上波テレビみたいなのを作ろうという芸術的感性への極度の鈍感さね、その前に立ちすくみ言葉を失う朝野十字であった。

え、なんなの？ 芸術至上主義に対する庶民的反感が根底にあるの？ それならそれでむしろまだ救いがある気すらするんだけど。貧乏な大家族がテレビで何度も特集されて大人気だったそうですけれどもね。ただの一度も見えてないけど。でもそういう価値観はあるんでしょうね。それすばらしいじゃんなにが悪いんだと開き直ればそれはそれでいいと思いますが、その冒頭と結末に菊池寛の忠実なコピーをつけるという暴挙をどう解釈せよと……。あっ。マッド・アマノですか。コラージュで風刺を出すという。いや、やっぱちがうと思うなあ。うん、明らかにちがうね。具体的に根拠を示せるよ。

ラストで占い師が帰ったあとで、また屋根に上った悟を見て、母親と父親じゃなくて祖父だったかな、二人がずっと伝聞情報を解説し続けるわけですね。弟がキャロルとメールをやり取りしてるとかね。成績優秀な跡取り息子が元キャバクラ嬢と付き合って、だからもう安心だと言い合うとんでもなくシュールなシーンですな。まあ、元キャバのほうが安心だという意味のつもりなんだろうけどさ。劇中にキャロルが救われるシーンを入れないで置いてここでこんな言い訳するというね。そして兄が七福神の中にキャロルの死んだ母の幽霊を見たという。そして娘を心配していたという。無茶苦茶でござりまするがな。七福神と現世への未練を抱えた幽霊がまず相容れないし、テーマ性を象徴するはずの彼岸のイメージをぶち壊してるし、てことは無垢な兄のイメージとも矛盾するしね。それとも、なに、兄が偽占い師より有能なお払い能力あったって解釈なの？ じゃあかわいそうがる必要ないじゃん。兄がキャロルのあとを継いで大儲けすればいいじゃん。てゆうかね、兄が非科学的霊能者だとすると、それは原作と致命的に正反対だよ。原作ではあくまで理性の優位が描かれていて、その踏み込めないぎりぎりの先に狂気の彼岸があったのだから、お手軽にこういうモチーフ持ってくるのは、原作に対するリスペクト皆無という動かぬ証拠なんだね。

結局ね、脚本家は実は話が二つに割れていることを自覚してますよ。そこでその相容れない二つの話をなんとかくっつけようとして、モチーフでつながりそうなところを無理やりつなげて、それをラストで台詞で説明してるんですよ。説明したいことはドラマで説明しろよ、それが演劇だよ。だから話が終わったあとでここに付け加えられてる説明は演劇ではなくて、話の辻褄合わせのためだけの段取りであり弥縫策でしかないのですよ。ミステリの段取り分節は、それでも謎

を構成するというプロット内の役割を担っていた。けれどもこの作品の段取り分節は、二つに割れてる話を無理やり結びつけるための非芸術な小細工でしかない。

芸術至上主義の原作の看板を借りて、大衆的家族愛ヒューマンドラマを書こうとする厚顔さにまず唾然としますね。ボンクラ観客が、こまかいところはよくわからなかったけど全体としてあったかくて楽しい作品だったよ、などと感想している様子が目に見えるようですね。そういう人は、この作品のプロットを把握せず、単にあったかそうなシーン、人情味ありそうな台詞から、それと関連しそうな過去の記憶を連想し、それをこの作品への感想だとかんちがいしているだけです。そしてそれはたとえば、振り込め詐欺師から電話がかかってきて、息子みたいな声が聞こえると、過去の楽しかった記憶が蘇ってくる。そして今起こっていることの感想として、これは息子からの電話だと考える、ってのとまったく同じ構造なのですね。そしてそれは嘘です。プロットは把握できなかったけどヒューマンっぽい台詞からあったかそうな感じを連想しました、という観客は、だまされてるのです。振り込め詐欺師が本当の息子ではないように、そのように観客をだますものは、演劇と似て非なる別の何かです。

事物の再認識が芸術の本分であるならば、このような過去の記憶の再生産と消費は、芸術ではなく、それどころか、読者の感性の自動化を増幅するという意味で、反芸術と言うべきでしょう。とりわけ、この脚本は、古典の看板を借り、なんだかあったかいヒューマンドラマぶってるために、その分、ますます多くのボンクラ客をだますことができるわけだから、余計にたちが悪い。

いえいえ、決して個人中傷でも人格攻撃でもないですよ。100%作品感想です。私は徹頭徹尾作品内部のことしか話してません。私が言ってるのは、作品の構成が二つに割れていて、原作と新しいストーリーのテーマが逆のことを言っていて、その自覚がありながらその矛盾はそのままにして説明台詞で取り繕っているってこと。これはね、欺瞞だよ。文学は真実であり欺瞞はその対極なんだよ。原作「屋上の狂人」のストーリーに従順なそぶりを見せながらテーマは無視する。これは面従腹背ということだよ。かといって、そんな原作がなんぼのもんじゃいと開き直るかという全然そうではなくて、つまらない段取り分節を弄して全体として人情話の体裁を取り繕おうとする。いい子ぶってるだけ余計にたちが悪いんだよ。はいはい、100%作品感想ですよ。作品の構成がいい子ぶってるって意味ですよ。

殻を打ち破る不良については、演劇界はウェルカムでしょ。優等生はどの業界だってウェルカムですよ。本当に優等ならね。一番いらぬのが優等生ぶってるやつですよ。ただ臆病で従順なだけで優等生扱いしてもらえるのは小学生まで。

弟が大学で習ってる機械工学の話で熱弁をふるうところはおもしろかったですよ。事務員の美樹が後輩を誘惑するところも、個人的にはウケなかったけど、シーンを盛り上げようとするパワー

がありました。ラストの占い師のお祓いのシーンもパワーがありました。でもって、それらはシーン自体が力を持っていますよね。人情話にまとめるための段取り分節ではありませんね。人情話の辻褄あわせとはまったく関係ないにもかかわらず、そういうところがおもしろいと思ったからどうしても入れたくなって入れたんですよ。それが演劇ですよ。演劇を大事にしてくださいよ。

過去の名作に題材を採った作品はたくさんありますが、そうであっても新しい作品としてのオリジナリティは必須です。オリジナリティで勝負する勇気と誠実さを持ってください。



今年に入ってなんかバタバタして1月も2月も観劇できなかったんですよ。それでそろそろ見に行きたいなーと思って、3/3土曜日が都合が良いのでその日になんかやってないかなと思って、いつも見ている[東京の小劇場スケジュール \(5000円以下\)](#)のページを見てたんですよ。このページだれがやってんのかなあ。なんかこのcgiとかに明るい技術系なんだけど演劇に興味のある人が個人的にやってるんでしょうね。インターネットってもともとそういうものだったんですよ、若い人、知らないかもしれないけど。

それで、ワンツーワークスの「ジレンマ・ジレンマ」がおもしろそうだなと思って、でも当日券が4500円で、若干高めなので、前売りを買おうかなと思ってるうちに金曜日になってしましまして、ぴあで調べてもローソンチケットを検索してもすでに販売終了。当たり前ですよ。それはそうなんです、ホームページを見ると、全席指定って書いてあるんですよ。てことは、当日券なさげかなあ。今までほとんどすべて当日劇場に行って当日券買って見てたんですよ。そういう気楽な感じが気に入ってるので、基本、これからもそうしたいんですけど。

それで、ワンツーワークスはまたの機会にして、ほか、ないかなと探して、「サイキックフライト〜頑張る7人のエスパーとあと2、3人〜」にしようと思ったんですよ。ところがホームページを見たら、開演一時間前に当日券の抽選を行うって書いてありまして。ってことは毎回満席確定なの？ うーん。当日行って抽選に外れたら無駄足だしなあ。

リストのサイキックのひとつ上の「グッドモーニング・マイ・ヴィーナス」はどうだろう。惹句を読むとおもしろそうな気もする。そこでホームページを見ると、金曜夜にustreamで中継とあったんですね。しかも無料らしい。そこで金曜夜にustreamで見ることにしました。

うんうん、ustream中継、いいと思いますよ。どんどんやってほしいですね。というのはですね、いまどきの中年はだいたい子供のころテレビでがんがんに無料映画が放映されていて、それを見てるんですね。良いも悪いもわからないうちにしかも規制が弱かったのでエロもスプラッターもフォアグラ用ガチョウの如く流し込まれ流し込まれ飲み込んで飲み込んで、つまりいまどきの中年がもし映画が好きだと言ったら、それはそのような時代背景があったってことなんですよ。だからネットで東京の小劇場の様子を無料で玉石混淆でどんどん放映し続けたら、二十年後には演劇大ブーム、絶対きますよ。

というわけで、作品はつまんなかったのがこれ以降あまり褒めどころがないと思いますが、ustream中継は快挙なので最初に褒めておきます、ってすごい感じ悪いですねえ。何様だってことですよね。ほんとすみません、朝野十字さまでございます。

これはね、しょうがないですよ、ただの感想とただの悪口は紙一重なんです。というのは、食用キノコと毒キノコはそっくりでしょ。このキノコの話好きなんでことあるごとにもう二十年ばかり何度もしてるんですが、毒キノコが危険なのは毒があるからじゃない。食用キノコに似てるからだ、ってことです。だから悪口言いたい人は、感想の振りして悪口言うわけですね。それでなんか少し憂さが晴れたような気がするんでしょうね。ほんと器の小さいゴキブリ野郎だと思いますよ、そういうやつ。ネットで粘着したりね。スマイリー菊池さんの名誉毀損した連中とかね。警察に捕まっても、全然反省せずに、他の人もやっていると、自分もストレスがあったのでそれで免罪してほしいとか、わけのわかんない言い訳ばかりしていたそうですよ。

端から悪口言うつもりで偽装してるやつはブロックするなりフォローを外すなりして当然ですね。相手にするだけ時間の無駄ですよ。けれどもまあ確かに映画とか演劇とかの場合はね、期待して見たけどつまなくてがっかりしてそれがストレスでそのストレスを発散するために悪口を書くとかね、そういうのも、気持ちはわからないでもないが、大人げないので、ぼくはそんなことしません。

あと朝野が気をつけようと思ってることはですね。小説の書き方とかで、これは基本だ、とか言うやつね。あのね、芸術文芸一般に、基本などと言うもんは存在しないからね！ 芸術の至高それすなわちオリジナリティって見地から見て、「基本」って言葉自体使うこと恥ずかしいことだから。著名な建築家でも画家でも音楽家でも、天才は絶対そんな言い方しないにちがいないからね。「基本」って言葉はね、小学校の先生とか公園の管理人とか、あのマトリックスの主人公の上司とかね。そういう杓子定規系御用達の言葉だからね。未来ある子供たちは先生にそういう感じのこと言われてもぜったい気にしちゃだめよ。

以上を踏まえた上でこれからこの作品のプロットの基本がダメって話をするんですけどね。だからさ、あのね、基本と言うのはね、作者の側にあるのではなくて、読者の側にあるんです。読者には読解の基本戦略がある。読解というのはとても論理的な作業なんです。意味を理解するという行為ですから、基本があって戦略があって、それは共有可能なものであって、だから相互主観的なある程度の客観性のある解釈が担保されるわけね。

そうしますと、この作品は、惹句にもあるとおり、ある町で手広く風俗業をやってる渋谷のチーマー上がりみたいなグループがあって、地元ヤクザと縄張り争いしてるんですね。実はチーマーの№1は、それなりにヤクザとも折り合って店を経営することに満足してまして、また、麻薬には手を出さないと決めてるんですけども、一方、№2は、ヤクザを潰して町全体を支配したいと思ってるちょっと変なやつなんですね。そして着物姿の銀座のママさんみたいな女の人が登場して、チーマーの№2をけしかけて、ヤクザの№1を殺してしまおうとするという、普通に無理だろうと思いますよねこの設定。ところがここにもうひとつ設定がありまして、超能力少女。おまえなんか死んでしまえ、と叫ぶと、言霊の力で相手を殺してしまうというね。彼女はある男に隷属させられていて、そいつが殺し屋らしいんですがね。しかも追いかけてきた屈強な刑事をナイフだか剃刀だかで一度なで斬りしただけであっさり殺してしまえるという。いやおまえのほうがよっぽど超能力者だろうというね。でもまあ言霊で殺したほうが殺害方法不明で足がつきにくってことなんでしょうか。この少女に命令して殺人を行い、金は自分が受け取るというね。しかしこの少女はなんでこの殺し屋に脅されて嫌そうにしてるのに反抗しないのかね。言霊でこの殺し屋を殺せばいいだけのようになりますけどね。ずいぶんとおバカさんですね。ちょっとバカだとかわいいけど、こうまでバカだと死んでほしいね。

この少女の登場が遅いんだよね。天空の城ラピュタのように、あるいはフィフスエレメントもパクったかのようにそっくりだけれども、冒頭に天から落ちてくるのがヒロインである。というのが基本である。というのが読者の側の読解のね。だからそうしないならしないで作者の自由にしてもらってかまいませんけど、読者はそういうふうに見てるし、それは相互主観的客観性≡すべての読者がそうなんですね。

いや、今ふと思い出したけど、この少女が冒頭で道に迷うかなんかで登場するシーンがあったな。でもね、それじゃあだめですね。けっこう中盤までこの少女の正体が隠されていて、相手役の男がこの子に惚れるシーンもずっと後ろのほうまでないんですね。そうじゃなくて、基本戦略として、冒頭で美少女がドーンと出る。映画なら顔アップ引いて体の線じっくり映す。次にそれを物欲しげに見る主人公のドアップ。そうすると、それ以前にモチーフがないために、美少女が話の前提となってその次のモチーフの意味を解釈していくわけですね。だからこれは基本的だけどとても有効な技法なんです。

ところが、この作品では、ヤクザとチーマー風俗業者と刑事との三つ巴の争いが冒頭からずっと長く続くんですね。だからそうすると読者はそういう冒頭を前提としてそういう話だろうと推測しながらモチーフを解釈していきますね。だから中盤でしずくって名前だったかな、超能力少女が正体を現すと、町の縄張り争いと対比させて彼女のモチーフとしての意味を理解しようとしています。つまり全編を貫くヒロインとしてではなくて、縄張り争いという主題の駒のひとつとして見てしまうんですね。これは私の個人的感想ではなくて、相互主観的客観性を持った解釈なんで

すね。そういうふうにもチーフが並んでいるということはそういうふうには読者に解釈させるということであって、それ以外ではないのです。

そして中盤でいよいよ超能力少女の正体が明かされます。これがふるっててね。ふるってるって言葉使うの久々だなあ。そういえばあれなんだっけ。ビーチャと愉快的仲間だっけ。いや、飛ぶ教室だったかな。そういう児童図書を子供のころ読んでいたら、登場人物のだれその株が急上昇したって書いてあって、なんのことかわかんなかった思い出の話は関係ないのでやめます。

さてそうしますと、舞台の上に、チーマー№2となぜか銀座のママがいて、一方では殺し屋と少女がいて、猿轡に手足を縛られたヤクザの№1がいるというシーン。実はこの銀座のママさんが、最初はヤクザの№1に対して、チーマー風俗業者を潰そうと持ちかけ、殺し屋を紹介するんですが、ヤクザの№1は現状に満足していて断るんですね。そして銀座のママは今度はチーマー№2のほうへ擦り寄って、ヤクザのほうを潰そうぜと持ちかけるわけです。だから結論としては前述どおり、チーマー№2が町全体を手に入れるべくヤクザの№1を殺すってことでまちがいないのですが、その結論へ到る道がこういったモチーフによって長く引き伸ばされてるのですね。その解釈は、このプロットはヤクザとチーマーの抗争を主題にしている、というものになりますね、客観的にね。

で、チーマー№2が、おれは直接殺らない、見てるだけだ、って言うんですね。なんで見る必要があるのかって全力で全人類が不思議に思いますね。ヤクザの組長を縛って連れてこられるほどの能力がある殺し屋なら、その場で殺してしまえばすむ話ですね。それをわざわざ生け捕りにして連れてきて、さらには少女の言霊で殺させます、どうぞごらんあれ、という。おまえはサーカス団の団長か！

安田大サーカスのヒロくんって、けっこうしゃべくりもできるんですよ。youtubeで確認してみてください。そんなトリビアなプチ情報も入れつつ、話を進めてまいりたいと思いますが、中盤になって、主人公の若い男、タクマ、彼は情報屋ってことらしいんですけどね。彼としずくが会いまして、しずくは殺し屋から逃げてきたと言うし、タクマはおれが守ってやるというんですね。これってさ、ラピュタの冒頭が中盤に来てるってことだよ。だからここまでのヤクザとチーマーと警察の三つ巴の抗争と話が割れてるんだね。話が割れることはよくないってことは、出版社の編集者ならみな言うでしょう。しかしなぜそれがよくないかという説明はできない。とにかく基本だからだめですとかね。すごくそう言いそうだねそんなイメージだね。なにが基本だバカ野郎！ 芸術に命懸けてたら決して出てこない言葉、それが「基本」。才能ある作家志望者はこのワードが出てきたら気をつけるよ。所詮あいつらサラリーマンですからね。そこでさすらいの無頼派一匹狼プロット分析一筋12年の朝野十字の出番ですよ。

情報屋タクマがしずくをかくまうのと平行して、ヤクザとの抗争に消極的なチーマー№1を№2が罫にはめて、自分がトップに立つというエピソードが描かれます。№1に惚れている女を麻薬漬けにして混乱させ、ナイフを手渡して、№1の前で「死ぬ」と言って騒げば、№1の気を引くことができるというんですね。で、№1の前でその女がなにをやるかという、錯乱して№1を刺し殺してしまうという。「死ぬ」→「殺す」へとピョーンとモチーフのつながりが飛躍してますね。まあわかりますけどね。要するに№2がトップになるプロセスを描いてるんですが、シーンをたくさんつなげてモチーフを引き伸ばしてるわりには辻褄合わせが杜撰ですね。詳細に語るのはそのモチーフに関心が強いからで、だから全体との整合性はなくてもそのモチーフについては何かしら伝わるものがあるってのが普通だと思いますが、長々とサブストーリーを膨らましている割にはモチーフ同士のつなげ方が投げやりで、ヤクザとチーマー連合との抗争という大枠に合わせて取ってつけてる感じが強くて、要するにこの抗争劇への作者の愛が感じられないのですね。

一方で、しずくがタクマのために料理を作ったり、ターミネーター2で少年がターミネーターに言葉を教える如くタクマがしずくに言葉を教えてあったり、二人で散歩に出かけたりするディテールがどんどん増えてきて、そういうモチーフに作者が親しい感情を持っていることが伝わってきます。

フィフスエレメントだと、貧乏な独身男が、彼女ほしいなあとつぶやいてるところに理想どおりの身長体重スリーサイズの美女が天から降ってくるわけですね。それが冒頭なので、これから主人公が彼女に惚れて、彼女のほうもまんざらではなくて、そうやって二人を中心に冒険が始まるだろうなという予測が立ちますね。一方で、前半に別のモチーフが長々とあると、その中に情報屋としずくが好き同士になる根拠があるのかと思って探しますがそれはない。しずくは目に見えないものに価値があると信じてるのに、タクマは目に見えるものしか興味がない。少なくともこの時点では価値観の不一致な二人ですね。そうやってここまでのモチーフに根拠がないにもかかわらず、突然しずくがタクマを好きだ好きだ言い始めるので、なんだこの女バカなだけでなくメンヘラなのかと思っちゃいますね。

読者は読解を通じて一貫性を形成する生きものです。だから話が二つに割れているとそこで意味を汲み取ることに失敗して興味を失う可能性が高いのですね。それは別段高尚でもなく芸術とも無関係な話であって、二つの話だったら二つ別々にするだろう。ひとつの話としてされているんだからモチーフの意味関係はひとつにまとまるはずだろう、という読者の基本戦略に従って解釈の作業を続けるというだけのことなんですね。つまりそれは読者の側の基本なので、まあ朝野はわかりましたが、劇場に来た基本がボンクラな観客の9割はプロットをつかみそこね、なんだかわけわかんなかったと思い、なんだかわけわかんなかったと思ったことすら忘れ、音楽も好みだし知り合いの俳優も出てたので満足だとかの作品の価値とまったく無関係に勝手なボンクラ感想

を適当にでっちあげ、それを自ら信じ込み、ブログに「ちょっとよくわかんないところもあったけど楽しかったよー」とか毒にも薬にもならないボンクラ記事をアップしてそのまま忘れてしまうでしょう。ほんとこんなことじゃ東京の小劇場の明日はないと思いますよ。

話が二つに割れてるというのは、残念なことにけっこうそういう作品はあるんですね。たとえばアニメのサマーウォーズでは、ヒロインが主人公のボンクラ少年を好きかどうかラストまで隠されてますね。ラストは崖の上のポニョの二番煎じのごとく女の子のほう積極的に少年にキスするという童貞妄想的シーンで終わるのに、サマーウォーズの場合はむしろ冒頭では好きじゃないってムードが強くて、ここが印象的に対照的です。そしてそれどころか、主人公の少年のほう彼女を好きかどうかというのも中盤になっておばあさんが死んだあとになるまではっきりしないんですね。あんまりはっきりしなくて優柔不断なので、中盤で落ち込む彼女に対して少年が自分ががんばろうという明確なシーンを見てもそれをそのまま素直に受け取れないほど優柔不断な展開なわけね。だからこれはもちろん欠陥だと思いますよ。サマーウォーズ褒めるボンクラ観客がたとえ100万人ゾンビの如く押し寄せても、地球がそういうゾンビに席卷されたただ独り生き残った理性ある人間としてであっても、サマーウォーズは失敗作だと朝野は言い続けます。

冒頭で天から落ちてきたヒロインに主人公が一目惚れしてイチャイチャしたあとでヒロインが危機に陥って、だからそれを助けるための冒険が盛り上がるという手順なので、主人公がヒロインに惚れるというのが中盤以降に遅延されてしまうと、読者は主人公の行動の動機をつかみ損ねるんですね。実際タクマは中盤まで主人公としてストーリーを引っ張っていませんね。

そしてとどめはラストの夢オチね。夢オチがだめだというのもだれもが言ってることです。けれどもどこまでもユーザー本位の親切設計な朝野十字は、夢オチがなぜだめなのかその理由まで説明してあげましょう。これも読者の基本戦略を理解していれば簡単なことなんですね。読者はフィクションである作品のモチーフを順次受け取りながらその意味を考え、全体としてひとまとまりのプロットを把握しようとしします。それは現実読者の内面で精神的なエネルギーを使って行われる現実の精神活動です。あとから振り返っても、あのときあんなふう感じた、こんなことを考えた、というのは現実のことであり現実の記憶として残りますね。作品はフィクションだけれども作品の受容過程は実体を持った現実なんですね。だから夢オチにしてしまうと、実体を持ったあとの読者の読書行為の努力全体に対して、「あーごめんごめん、今の全部ウソね！」と言ったのに等しいのです。だからこういう読者との信義にもとることしちゃいけませんよ。

ラストは、タクマが殺されしずくが殺し屋に連れ去られ、そこでしずくが、しずくと殺し屋の存在を言霊の力で消滅させ、そもそもこの町に殺し屋もしずくもこなかったという世界に変えるというあっけに取られる卓袱台返し。これはもう細かく言う必要もなく基本としてだめです。ふりかえれば、マトリックスで、キアヌが遅刻してそれを叱る上司は、ごく当たり前の社会常識を言っていました。サラリーマンが遅刻しちゃいけないのは常識です。同様に、最後の夢オチもだめなんです。

どこまでも親切設計な朝野十字だから、蛇足を付け加えますが、ラストのラストで、ヤクザとチ

ーマー連合と警察がそれなりに均衡を保ってる元の世界が描かれ、タクマが探偵業を始めて、三つのグループのどこともうまいことやってる状況が描かれます。タクマはしずくと思しき女性を二年間探しています。そして暗転して、しずくの声で「ただいま」タクマの声で「おかえり」と聞こえて終幕です。

これはね。物語ることの放棄ですね。第一には、作者が最後まで町の抗争としずくとの二つのストーリーをひとつにすることができないまま、抗争のほうをなかったことにして投げ出したということですね。第二には、しずくが自分も含めて消滅させた理由がわからないですね。殺し屋だけ消滅させてタクマと暮らせばいいんじゃないのという当初からの疑問が全然解かれてないですね。さらには消滅させた自分を二年後に戻す設定上の理屈がわからないですね。読者の立場に立てばね。けれども作者の立場に立てば簡単な話で、町の抗争の話はずっと思いついていてもう作っちゃった。後半になるにつれタクマとしずくの話が大きくなって辻褄合わせが最後までできなかったの、町の抗争はなかったことにしよう。という作者の都合でこうなったんですね。そして最後の台詞は、作者がモチーフについて考えているうちに思いついたイメージですね。しずくも含めて消滅させないと話の辻褄が合わない気がしてそうしちゃったけど、でも、タクマはずっとしずくを好きなんだろうなあ、しずくも帰ってきたいんだろうなあ、と思ってるうちに、そういう声が聞こえたのでそれをそのままラストで表明しましたというね。それだけですね。だからどういう設定のなんの理屈でそんな声が聞こえるのか読者に対してまったく説明がないのですね。

けれども、作者は最初に読者と契約したはずです。これから物語を話しますよと。そして物語とは、共通の基盤に立って客観的に理解できるモチーフによって成り立つものです。だから№2が麻薬を使って女を利用して№1をなきものにするときには、順を追ってモチーフを因果関係でつないで説明しようとしたわけじゃないですか。その説明も不十分でしたけれども、このラストではその程度の説明すら放棄してます。読者との対話を拒否してるってことです。

ですのでこのラストについての読者の側の感想は、端的に「×」です。



低線量被ばくと内部被ばくの脅威～私たちにできることは何か～ ユーリー・バンダジェフスキー博士 - 2012/03/13

バンダジェフスキー博士の講演内容要旨（あくまでメモを取らなかった朝野の記憶による）

1. チェルノブイリ事故後の甲状腺がんの発生は予測より早かった。理由は甲状腺へのセシウムの蓄積である。（※1）
2. 検死解剖したたくさんの遺体の心臓にセシウムの蓄積があり、心筋に炎症が見られた。10ベクレル/キログラム程度の蓄積でも、心電図に異常が表れた。長期にわたるセシウムの蓄積が原因だ。セシウムは細胞内のミトコンドリアを破壊する。ベラルーシでは、チェルノブイリ事故以前からチェルノブイリ事故後と同じようにセシウムによる土壤汚染があった。その理由は不明である。（※2）
3. セシウムは腎臓にも蓄積し、代謝に悪い影響を与える。汚染地域の新生児のコルチゾールは、コントロールと比べて半分くらいに減っている。
4. セシウムには肝臓にも蓄積し、免疫に悪い影響を与える。
5. 汚染地区の子供たちにおいて、セシウムの体内蓄積量と白内障に罹患する率は正比例する。（※3）

※1 木下黄太さんがですね。沖縄の講演のとき、通訳がひどいとツイッターでつぶやいてたバカがいたが、とんでもない。通訳は専門的な内容を十分理解している、と大変憤慨してました。ちょっとね、すごい、おっかなかったです。なんか普段からおっかない人みたいですね。だから小声でそっと言いますけどね、今回の通訳が沖縄のときと同じ人かちがうかすら知りませんが、今回の通訳がうまいか下手かと言えば、すごい下手だったです。「てにをは」がだめなんです。だから意味がわけわかんなかったです。その上、専門用語になるとカンペを見るんですが、その専門用語というのがですね、世界保健機関とか、虚血性心疾患とか、そういうレベルでいちいち通訳がとまってしまうんですね。しかも博士の熱弁を妙に砕けた口語表現に翻訳して、「あの、やっぱり、わたくしは、ゴメリ市で、ほんとに、それをいろいろ研究したんですよ」みたいなね。それってなんだよ、っていうね。いや、完全にこの通りじゃないですよ。あくまでこんな感じっていう感じでね、それはもう確かにこんな感じでした。だから「予測より早かった」という予測が一般の予測なのか博士の予測なのか、そもそも甲状腺がんに関する予測なのかすらはっきりしないんですね。ただそのとき朝野にはそういうふうに聞こえたっただけです。

※2 ベラルーシはチェルノブイリ以前からセシウムに汚染されていたという話は確かにされたようです。それが全体のプロットとどうかかわるのかわかんなかったんですね。木下さんもそこらへん説明不足だと感じたみたいで、講演後のセッションで、以前からの汚染に加えてチェルノブイリが起きて病気が増えたってことですかみたいな質問をしまして、それに対するものかどうかすらはっきりしないのですが、通訳の人の返事は、なぜチェルノブイリの以前からベラルーシのチェルノブイリに接する側のゴメリ州が放射能で汚染されていたのかはわからない、というものでした。大気中の核実験によるものではなくて、当時のソビエトが隠蔽した事故なり実験なり

でベラルーシが以前から汚染されていたってことかな、という、これはあくまで朝野がそのときそんな連想をしたってだけなんですけどね。

※3 ここまで聞いてきて、急に思い出したんですが、心電図の異常はセシウムの体内蓄積が低くてもけっこう高率で起こるという話のときに、なんだったかな、正確には覚えてないですけど、「わたしは、とてもとても、とてもこれを考えました」というふうに通訳の人が言いましてね。これってなんだよっていう。いまだにわからないのですが、そのとき見てたグラフが確かに白内障のグラフとちがって正比例しておらず、低い蓄積でもかなり異常があるという感じだったような記憶があります。全体のコンテキストから大胆に推測するに、ベラルーシの一部はチェルノブイリ以前から長期に渡ってセシウムに汚染されていた。ゆえに低い体内蓄積の場合でもそれが長期であるならば、セシウムによる悪影響が出ると考えられる、と博士は言いたかったのかな、というような雰囲気を感じました。

はい、以上で一す。

いつもはどうでもいい話を長々するんですが、そしてそういうナラティブ上の問題提起を[チダイズム](#)と言います。これはたった今、朝野が命名しました。新批評、フォルマリズム、構造主義、ポストモダンときて、これからはチダイズムですよ。ほんとのこのブログおもしろい。でもさすがに今回は空気を読んで先に要約を書きましたんで、あとはもうね、これはきっかけだからね。私も今回の講演を見て、バンダジェフスキーで検索していろいろ読んでみて興味をひかれることたくさん出てきました。またいつかそれらについてお話できる機会もあるでしょう。

というわけでもう終わりなんです、せつかくですので、最後にロシア人の名前の覚え方を伝授いたします。たとえばドストエフスキーね。これをドなんとかスキーだったな、とかうろ覚えしてしまうと、ドエストフ？ ドフエフ？ みたいにまちがってしまってスキーにたどりつけないという症状が出てしまうんですね。ロシア系なんだから最後がエフとかスキーとかになるのは当然なのでそこはいちいち覚えなくていいです。そうじゃなくてまずドストをしっかりと覚える。ここを覚えておけば、あとはエフとかスキーとかだなと気づいて、ずっとドストエフスキーと出てくるんですね。シクロフスキーもまずシクロを覚えておく。思い出すときにはシクロ、と口に出して言う。すると残りのフスキーはずっと出てきます大丈夫です。バンダジェフスキーも同様にバンダ、をしっかりと覚えるのがコツですよ。ただバンダをパンダとまちがえて覚えるとグーグル検索のとき「もしかして:バンダジェフスキー？」と注意されてしまうのでそこだけ気をつけてください。

(追記) 検索しているうちにバンダジェフスキー博士の論文らしきものを発見して翻訳して見たんですがね。これです。

対訳・セシウム137による子供の臓器の慢性的汚染について

ユーリ・バンダジェフスキー (朝野十字 訳)

<http://p.booklog.jp/book/32673>

朝野はただの学部卒ですが卒論はいちおう生物学系だったのでそのときのことを思い出そうとしましたがなにしろ大昔のことだしその後全然無関係な会社に就職したので全然思い出せないんですが、ただ、論文の実験方法は他の人が追試できるように詳細に書かなければならないと言われたような気がします。そうしますとこの論文は方法の欄が極端に短くてパッと見奇妙ですね。そうして辞書を読み読み一行ずつ翻訳するうち大変びっくりしました、というのも方法の欄にまったく実験方法が書かれてなかったんです。極端に短い上に最初から最後まで書かれてあることと言えば、ベルラド製の放射能測定器がいかに正確で優秀かということばかりなんです。これは絶対におかしい。たとえば「ベルラドはゴメリ医大にRug-92M自動ガンマ線測定器を提供した。測定時間は100ベクレル／キログラム以上のものは1分間、50～100ベクレル／キログラムは10分間、49ベクレル／キログラム以下は正確に測れない」なんだこれ。放射能測定器の裏に貼られたシールに書かれた説明書きじゃん。

これは絶対に博士が書いた文章ではありません。もちろん学生の筆でもありません。学生は博士の指導の下に論文を書くからこんなこと絶対にありえない。

背景のところに胎盤がセシウムを吸収するから胎児は比較的守られるという記述があるのですね。だからそれについては朝野は知らないけれども背景のところに書かれているのだからその分野の研究者の間で共有されている知見だろうと思いますね。ところが結果の欄にも同じことが書かれている。結果というのは実験から必然的に導かれるものだけしか書きちゃいけないのですね。じゃあ実験の結果として新事実としてこれがわかったのか。しかし実験方法がなにも書かれていないのでそれも全然不明なままですね。

結果と論議が三つのセクションに分かれていて、それぞれ全然別の実験結果なんですね。そして論議のあとに結論がきて、これもはっきり覚えてないけどなんか変かも。しかも全然実験の結論じゃないし。

朝野十字がなぜ名探偵なのかについては「小説の基本構成」の中で明らかにしているのでそちらを買って読んでください。

なにしろ名探偵なので推理過程をはしょって結論だけズバリ申し上げますと、この論文みたいな

ものは、博士の筆になる文章もあるようですが、全体として博士の書いたものではないと思います。複数の博士の文章をあちこちから継接ぎして「背景・方法・結果」という論文の形式をわかってないだれかが適当に当てはめたが、論文の魂である「方法」の部分はどう取り繕っていかわからなかったので、放射能測定器のパンフレットの宣伝文句を書き込んだというのが真相でしょう。じっちゃんの名に懸けて！

逆に言うところの論文を根拠に博士を批判するのはお勧めできませんね。背景とか結論とかの一部はとても興味深いことが書かれてあって、このへんは博士が実際に研究しようとしたことなんじゃないかという感じがします。ウィキペディアによると2003年は博士が投獄中ですね。奥さんが世話になったとかいろいろ大人の事情でこれについては沈黙しているのかもしれませんが。いずれにせよ博士は現役の科学者であり釈放後はウクライナの病院に勤務しているということなのです。すでに新しい論文が発表されているはずだし今後一般向け著作の邦訳の予定などもあるそうです。

演劇展望[vol.1]

<http://p.booklog.jp/book/27518>

著者：朝野十字

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/asanojuji/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/27518>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/27518>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.